



婦人の子供

第一卷  
第三號

# 婦人子ども 第三卷 第三號 目次

## 首

故英國女皇ビクトリア陛下、同新帝エドワード七世陛下、同皇后アレキサンドラ陛下御肖像

## 子ども

たんじょうび〇牛太と小人〇天神様とおうま〇うまの唱歌〇狼の物真似〇無精殿へ〇郵便切手のおまけ〇謎々

## 家庭

子母里そーだん  
母と子ども  
育児のはなし  
消えぬ記憶  
今昔いろは料理  
女児の袴  
印度土人の家庭生活  
機關車の後押し

## 學講

義術  
關本幸太郎

## 史傳

藤田東湖の妻里子  
ロンドン夫人  
故英國女皇ビクトリア陛下

## 文苑

車のわたち  
夜の梅  
用を戀  
新しき學校〇花の木陰〇和歌數首

## 說林

兒童訓練法  
女子の職分

## 研究

臺灣の古談  
鳥取の俗謡(樂譜附)  
倫敦警見  
圖畫教授に付きて

東石山永野 井村井田 基國材幸則 吉次美次文  
關本幸太郎 中村五六 下村三四 鄭越 全人生 擊水 らめ生

## 雜

寒問  
女子教育につきての疑問  
女服改良につきて  
婦人界に及ぼす俳優の力〇湯屋のさま〇石井泰二郎氏よりの書翰〇盜賊遊戲(改真衣服につきて)婦人の覺悟〇矛盾の性情〇思ひ出るまゝ

## 彙報

英國幼稚園の狀況  
外數件  
安井てつ

●發行は毎月五日毎に發行第一號一月廿日發行

●定價 郵稅金拾錢●郵稅金拾錢●六冊前金拾七錢

●臨時増刊は其都度定價を定めて別に申し受く●切手代用は壹割増にて壹錢切手に限る

●注文 是は總て前金にて日本橋區本町三丁目廿三番地金昌堂宛領收送金は別々發送せず本誌の到達を以て領收の證と心得らるべし

●購讀者 知なとん●前金租切候節は赤にて●印を創姓名の上に附し候間前金御送付なとん●御入用なき時は御斷りなとん

●編輯 學校附屬幼稚園内フレル會宛のこと●東京市京橋區木挽町九丁目三十二番地

●廣告料 十錢●特別半頁十一圓●壹頁二十圓●壹等半頁八圓八十錢

●同明 治三十四年三月五日發行

●東京市日本橋區本町三丁目廿三番地

●東京市京橋區木挽町九丁目三十二番地

●東京市京橋區築地三丁目十五番地

●東京市日本橋區本町三丁目廿三番地

●東京市京橋區本町三丁目廿三番地

●東京市京橋區本町三丁目廿三番地

●東京市京橋區本町三丁目廿三番地

●東京市京橋區本町三丁目廿三番地

●東京市京橋區本町三丁目廿三番地

●東京市京橋區本町三丁目廿三番地

# 國語研究會編

## 高等小學普通文教科書

全二冊(三月新刊)

和裝製美本

一本書は改正敎則に基づき高等小學校國語科綴方の敎授用參考書として編纂したるものなるが之れを兒童に持たしめて模範文となさしむるも可なり

一本書は各學年に分ちて敎材を排列し其敎材は今回各府縣に採用せられたる主なる讀本に準據し併せて一般に適合せる日常必須の事項を網羅して記述せり

一本書は始めに敎授上の心得として第一章に注意すべき要件第二章に敎授法第三章に添削法第四章に往復文の容儀即認方第五章に公用文を掲げ叮嚀懇切最も適切に説述せり

一本書書簡文は候文體を採用せるは勿論なるが去かも口語體を本體として説述したるを以て其用語は極めて平易にして兒童に解し易きのみならず各文章の欄外には用語の應用を列舉して敎授者の便に供せり

一本書に用ひたる假名、字音假名遣及漢字はすべて小學校令施行規則に準據せり

一本書は分ちて二巻とし一巻は一、二學年用に充て一巻は三、四學年用に充てたりされば之れを兒童に持たしむる場合には其必要に應じ各自一巻づゝ購求するを得べし

一本書は中正なる議論と確實なる實驗とを以て普通文の形式日用文の用語及其連絡敎授上の配合等目下敎育社會に噴々たる一切の疑問を悉く明解して説述したるものなれば現今の如き革新時期に際しては蓋し無二の良考書ならむ

### 發行書肆

東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地(電話本局九百五十八番)

### 金昌堂

此廣告依御文の方婦人の子供を見たる御旨附記を乞ふ

女子高等師範學校講師岡田起作先生編并書

# 女子書翰文

文部省 上卷正價金貳拾五錢 下卷正價金貳拾八錢 郵税各金四錢宛  
部省 儉定 齊

# 女子習字帖

全四冊

發兌元 三卷金拾貳錢 四卷金拾壹錢 郵税各金貳錢宛  
東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地

# 烏丸帖

上卷 金拾八錢 下卷 金貳拾錢 郵税各金四錢宛

# 古今和歌集序

定價金貳拾五錢 郵税金貳錢

金昌堂

女子高等師範學校 教授 理學士 平田敏雄校閱  
大阪第一高等女學校 教諭 小島松之助編述

## 理科

化學礦物の部

圖四十個入菊版美製本 定價五十錢

同一女子理學 小島松之助編述

## 理科

物理學の部

圖九十七個入菊版美製本 定價六十錢

右は高等女學校女子師範學校及之と同程度の學校にて各一學年間每週二時間の授業に適用せんが爲に編述したるものにして此教科に關する日常近切の事實及應用を成るべく簡明に説き且其圖をも多く加へ了解し易らしめんと努めたるものなり  
幸に御高覽の榮を給はらんことを願に希上げ候

發兌 東京市日本橋區本石町三丁目  
發兌 大阪京區錦町四丁目

金昌堂 集成堂

# 文部省檢定濟

## 高等女學校用教科書廣告

新保磐次著

子女  
日本讀本

全 八 冊  
定價金壹圓五拾錢

寺尾捨次郎 共編  
有坂幾造

子女  
算術教科書

全 二 冊  
定價金壹圓四拾五錢

山崎勇編

子女  
幾何學大意

全 一 冊  
定價金參拾八錢

寺尾捨次郎 共編  
能勢頼俊

子女  
理科教科書

全 二 冊  
定價金七拾三錢

荒木益畝編

毛筆繪手本

全 一 冊  
定價金壹圓六拾五錢

塚本義子著

家事教本

全 一 冊  
定價金七拾五錢

(前付の四)

發行所 東京區本町三丁目 橋本區 金港堂書籍株式會社

賣捌所 東京區本町三丁目 橋本區 金昌堂



下陸アリトクヰ皇女故國英



下陸ザイル,アリマ,ラドンサキレア后皇同 下陸世七第ドーワドエ帝新

# 婦人と子ども

第一卷第三號

(明治三十四年三月五日)



(本欄は凡て  
轉載を禁す)

たんじょーび

きょーわ ぼくの たんじょーび だから みんな  
な おいで にーさんも ねーさんも おかーさま  
が ふくびきを して くださるとさ あー  
ぼち も きた

ねーさんの にんぎょー も いらっしやい



わねーさん ふんでください  
 はいかーさまのところがり「やー、おー

さーくちを おひきなさ  
 いな  
 にーさん わ「にっぽんの  
 たいしょ」それでわ たこ  
 です  
 やー二まいばんでさと  
 ーおにたいさのふか  
 いーないーなーぼくの

きなもちやの　とら　だな―　ね―さんわ」あ

しのおともだち」げた　でしよ―」

「あてられました」

「ぼち　にわ　おかし　でもやる―」

半太と小人

むかし―ある所に　靴屋の半太とゆ―　正直者

が　ありましたとさ。　所が　ある時　商賣で大變な

損をして　丸つきり家が貧乏になつてしまったので

す。　夫で家にわ、　何にもない様になりましたが　夫

でもまゝ　いゝ事にわ　一足の靴が造れる位の　革が  
残って居ました。

或晩のことでしたが　半太わ　其革を截って置き  
まして　明朝になつてから　夫で靴を拵える積で  
寢て仕舞いました。

さて明朝になつて　半太わ　疾から起きて　そ  
こいら片附けて　御飯もすまして　さゝこれから  
仕事に懸ろーと思つて　仕事場へ行つて見ますと  
不思議な事にわ　チャーンと　靴が一足出来て居る  
のです。『ばてな　妙なことも　あればあるものだ』

と思つて、尙手に取つてよくく見ますと　中々立つ  
派に出来て居て　とても人間の手で　出来たものと  
わ見えなない。

所え　買人が一人　やつて來まして　其靴を見て  
これわ　どーも甘く　出来て居るとゆーので　早速  
高いお金で買つて行きました。　半太わ　其お金でこ  
んどわ二足分の革を買つて來まして、其晩になつて  
から　また明日の用意にと思つて截つて置いて　伏  
床え　這入りました。

所が　明朝になつて　起きて見ると　又チャンと

靴が二足出来て居る。これわ妙だと思——うちに  
 た買人が二人やって来て　こんどわ　四足分の革  
 買える丈のお金で　其靴を買って行きました。

それで、こんど四足丈出来る様にして置くと　明  
 朝になつてまた　チャンと　出来て居る、するとす  
 ぐにまた買人が来るとゆ——様な具合で　毎日々々續  
 きましたから　そ——して居る中に半太わ　又も  
 との通りの　金持になつたのです。

ある晩のことでしたか　も——正月に間もないと云  
 一時間でした。半太わ　何時もの様に　革を截つて



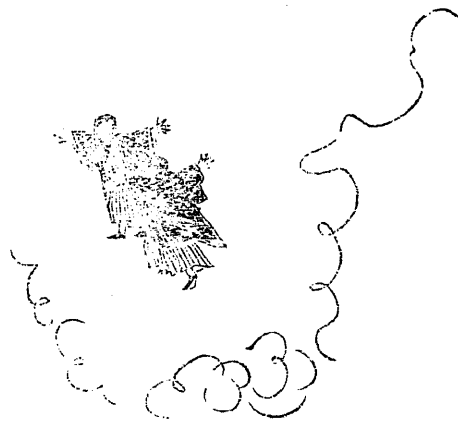
置<sup>お</sup>きまして　さーこれから休<sup>やす</sup>もーとゆー時<sup>とき</sup>お内儀<sup>うちぎ</sup>さん  
 んに　いーますにわ　「どーだね　一<sup>いっ</sup>體<sup>たい</sup>不思議<sup>ふしぎ</sup>でなら  
 ないじやないか。　こーやって毎<sup>まい</sup>晩<sup>ばん</sup>　靴<sup>くつ</sup>を拵<sup>こしら</sup>える用意<sup>ようい</sup>  
 をして置<sup>お</sup>くと　チャーンと　明<sup>あ</sup>朝<sup>け</sup>になつて　出<sup>で</sup>來<sup>き</sup>て  
 居<sup>い</sup>るから妙<sup>まう</sup>じやないか　まーお蔭<sup>かげ</sup>で　こーして商賣<sup>しょうばい</sup>  
 も繁昌<sup>はんじやう</sup>して來<sup>き</sup>て　有<sup>あ</sup>難<sup>がた</sup>いこつたが　全<sup>ぜん</sup>體<sup>たい</sup>誰<sup>だれ</sup>だろー  
 こんなに毎<sup>まい</sup>晩<sup>ばん</sup>來<sup>き</sup>て　働<sup>はたら</sup>いてくれるのわ」　するとお内  
 儀<sup>お</sup>さん　「そーですよ　ほんとーに　私<sup>わたし</sup>も不思議<sup>ふしぎ</sup>でな  
 らないの。　どーでしよー　今<sup>こん</sup>夜<sup>や</sup>わ　二<sup>ふ</sup>人<sup>たり</sup>で起<sup>お</sup>きて居<sup>い</sup>  
 て誰<sup>だれ</sup>だか　見<sup>み</sup>届<sup>とど</sup>きよーじやありませんか」　「そーそれが

宜<sup>よ</sup>かろ<sup>う</sup>」と申<sup>まう</sup>すので 二人<sup>ふた</sup>わ 室<sup>むろ</sup>の隅<sup>すみ</sup>に隠<sup>かく</sup>れて居<sup>ゐ</sup>  
 っ だんく<sup>う</sup>と 夜<sup>よ</sup>の更<sup>よ</sup>けるのを待<sup>まち</sup>つて居<sup>ゐ</sup>ます。  
 そーこーして<sup>う</sup>る中<sup>ちゆう</sup>に 近<sup>きん</sup>所<sup>じよ</sup>の人<sup>ひと</sup>も 皆<sup>みな</sup>寝<sup>ね</sup>て仕<sup>し</sup>舞<sup>ま</sup>つ  
 て 夜<sup>よ</sup>が だんく<sup>う</sup>更<sup>よ</sup>けて來<sup>き</sup>ますと、 あたりが シ  
 ーンとして 只<sup>ただ</sup>柱<sup>はしら</sup>時<sup>とき</sup>計<sup>けい</sup>のチツく<sup>う</sup>とゆー音<sup>おと</sup>が 急<sup>きゆう</sup>に  
 耳<sup>みみ</sup>に立<sup>た</sup>つてき<sup>き</sup>ました さー もー出<sup>で</sup>て來<sup>く</sup>る時<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>だな  
 と 思<sup>おも</sup>つて 二<sup>ふた</sup>人<sup>たり</sup>わ 息<sup>いき</sup>を殺<sup>ころ</sup>して 隠<sup>かく</sup>れて見<sup>み</sup>ていま<sup>いま</sup>す  
 と これ<sup>これ</sup>わ 不<sup>ふ</sup>思<sup>し</sup>議<sup>ぎ</sup>！ どこか<sup>ここ</sup>らとなく 二<sup>ふた</sup>人<sup>たり</sup>の誠<sup>まこと</sup>に  
 小<sup>ちひ</sup>な人<sup>じん</sup>間<sup>げん</sup>が ふいと出<sup>で</sup>て來<sup>き</sup>たのです。 それ<sup>それ</sup>わ 小<sup>ちひ</sup>い  
 と 言<sup>い</sup>つたら 皆<sup>みな</sup>さん<sup>さん</sup>の手<sup>て</sup>の掌<sup>ひら</sup>にでも 座<sup>ま</sup>れそーなほ

どなのです。「おや  
つ」と思おもつて見みて  
居いますと 此この二ふ人たり  
の小人こひこわ チヤン  
と仕し事こと場ばえ座しつて  
例れいの革なかしがを取とるとす  
ぐ さー糸いとで縫ぬい  
やら槌つちで打うつやら  
夫それわ く 小こな指ゆび  
先さきで まことに手て早はやく仕し事ことをしまして 一い時じ間かんも 經た



たと　思<sup>おも</sup>ーと　もーチャンと靴<sup>くつ</sup>が　出<sup>で</sup>來<sup>き</sup>ました。  
すると二人<sup>ふたり</sup>の小人<sup>こびこ</sup>わ　どこともなく　ふいと　飛<sup>と</sup>ん  
で　行<sup>い</sup>きました。



「おやまー　小人<sup>こびこ</sup>でしたよ　二人<sup>ふたり</sup>をお金持<sup>かねもち</sup>にしてく  
れたのわ　ねーあなた　何<sup>なに</sup>か御禮<sup>おれい</sup>  
をしなければなりません。おー  
そーく　あんなに飛<sup>と</sup>び歩<sup>ある</sup>いてわ  
居<sup>か</sup>るものゝ　あの二人<sup>ふたり</sup>わ　まー裸<sup>はだか</sup>  
體<sup>だ</sup>ですもの　こんなに風<sup>かぜ</sup>の吹<sup>ふ</sup>く晚<sup>ばん</sup>  
などわどんなに寒<sup>さむ</sup>いでしょー　な

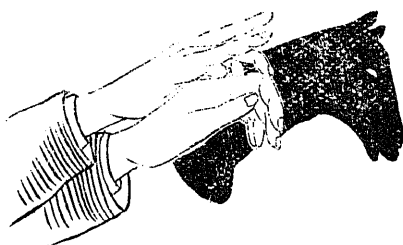
んなら小さな衣服や 羽織袴や、足袋を拵えて上げ  
 たらどーでしよーねー」お内儀さんわ いー人です  
 から 半太に相談しますと 半太も「それがよかる」  
 と云ーので 明日になつて お内儀さんわ 急に拵  
 え出して 其晩方 いつもの革の代に 仕事場え持  
 て行つて そーと置いてやつて 又かくれて  
 見て居ました。すると眞夜中になつてから また例  
 の様に 二人の小人はどこからとなく飛んで來まし  
 た それで「仕事にかゝろー」と思つて見ますと革がな  
 いもんですから 不思議に思つたのか 二人わ 小

さな顔を見合せて居ましたが やがて そこに置いて  
 くれた小さな衣服を見て すぐ取って 着て見て  
 キヤツ／＼云って喜んで 互に見較べたり引張合  
 ったり何かして、騒いで あっちこっち飛び廻って居  
 ましたが と／＼戸口の外へ飛んで行きました。  
 夫から小人はもゝ來ませなんだのです。靴屋の  
 半太わ 其後だん／＼と儲かって終にわ大變な大金  
 持になりましたとさ。



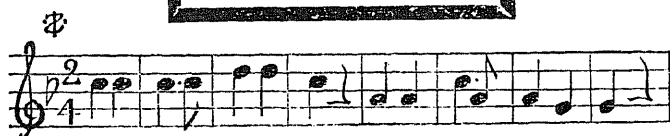
天神様とお馬。

さー 皆さん  
天神様と  
お馬が  
でました。

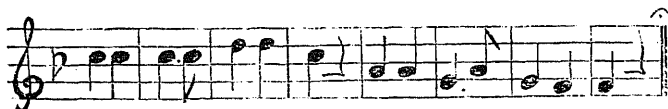


こんどわ

# ま う お



(1) オウ マヨ スス メ タイ ミヤウ ノセ テ  
(2) アカ ゲノ ウマ ワ バイ ミヤウノ オウ マ



オウ マヨ スス メ ソレ ラチ ノセ テ  
シロ ゲノ ウマ ワ ソレ ラノ オウ マ



イサ メル コーエー リ ヒン ヒン ヒーヒー ン  
スス メヤ スー スー メ ヤ マ サカ コーエー テ

お う ま

おうまよ すゝめ 大將たいしやうのせて

おうまよ すゝめ われらをのせて

いさめるこゑわ ヒン ヒン ヒヒン

赤毛あかげの うまわ 大將たいしやうの おうま

白毛しろけの うまわ われらのおうま

すゝめや すゝめ 山坂やまさか こゑて

## 猿の物真似 (二)

### やまとの翁

猿といふ獸は、元來非常に狡猾ですから、鐵砲を以て射て取るなどは、中々六かしい。何故かといふと、一寸でも、撃つ風を見せると、ちぎ隠れて仕舞ふからです。ですから、翁が、さつきお咄した様に、猿に真似させて取る様なことをするんです。

で、も 一つ、こんなお話して見ませうか。田なかの山へ行くと、例の猿どもは、大勢樹の枝に留つて、しきりに、キー／＼と云つて騒いで居ましょー。そこで獵師は、鐵砲など見せる、すぐ逃げられますから、そんなものは持て行かないで、天坪棒一本丈さげて行くんですが、さて猿どものある所へ行きまして、例の通り、よく見える所へ行つて、素知らぬ顔して天坪棒

十

を以て、しきりに船をこぐ風をして居るんです。

すると、今迄騒いで居つた猿どもは、急に黙つて、仕舞て、ジツト眺めて居る。はてな、人間と云ふものは、奇妙なことをするもんだなど云ふ様な顔附して、見て居る。暫すると一匹の猿は、忽考へ付いた様に自分の頭の上にある樹枝を握んで獵師のやうてる様な具合に船こぐ風をやり出す。獵師は、これを見て、さー占めたと思つても態と見ない風して一生懸命に、下でやつて居れば、猿も一生懸命に立つて、上でやつて居る。もー宜い時分だと思ふ時獵師は忽、天坪棒を捨て、仰向に倒れる。すると猿も、いきなり杖を離して仰向に倒れるから、さー堪らない。四五間も高い樹の上から落こつて、いやといふ程身體を岩の上で打つけるもんだから立つことも出来ないで、もがいて居る所を獵師は、いきなり走つて行つて縛つて生擒にして

歸るんですとさ。

## 無精較

▲ある處に二人の無精者が居つた。一人の無精者が云ふには

「どうだ、今から二人で、無精較をしようじゃないか」

すると今一人は、

「僕はするのも面倒臭い」

▲これも一人の無精者、ある時旅をして田舎を歩いて居つた。所が丁度晝ごろになつて來て腹が空いて耐らなくなつた、勿論腰には辨當を下げて居るのであるが懷手をしてる手を出して、これを取るのが、面倒なので、「まゝよ、仕方がないは、誰かに出遭ふに違がないから、そしたら其人に取つて貰ふまでのこつた」

なぞ、思つて腹の空いたのも我慢して歩いて居つた。すると向うから、饅頭籠をかぶつて、顔を少し仰向にして大きな口を張つて懷手としながら来るものがあつたので、「や、彼はきつと腹が空つてゐるのに違ない夫で口をあんなに開けてゐるのだ、一つ彼に相談をして見よう」と云ふので、側近くなつてから、

「もしく口を御開けなさつてゐる所から見ますと、貴所はお腹が空いてゐるのでせう。私も同じく空いてますので、實に腰に辨當も下げてゐるんですが、夫を取り出すのが、少々面倒なので申しかねますが、握飯を一つ御別まうしますから、一つ取つて頂きますまいか」すると其男は口を開たまゝで

『なーに私だつて笠の紐が解けかゝつてゐるのをこうして口開て顔で止めて居ますのぢや』

# 郵便切手のおまけ。

或る田舎者が、郵便局へ来て、三錢の郵便切手が高いといふのでしきりに二錢五厘に負けるといつて値切つて仕様がなないので、局員殆ど持て餘して居つたが「これは、此價がチャンと定つて居て錢では引くことが出来んのだが、そーねぎるなら仕方がないから品物の方でまけてやろー」

と云ふので白い紙が半分ばかりも附いてる端の方の切子を買つてやつた所が、田舎者は

『そだから、何でもねぎらねば、損なこつた』

## 謎々

- (一) 蚊の最期は(みのおはり、美濃尾張)
- (二) 東洋の聖人を御飯道具とは(釋子)
- (三) 雨夜の三味線を文房具二とは(インキトペン、陰)

## 氣でべんく

(四) 武士の喧嘩を郵便に使ふものとは(切手四枚、斬つて仕舞ひ)

## この次の考へもの

(一) きつね上下をぬいで、おどれば、ひぢなも上下をぬぐ。(植物の名二つ)

## 無理のことはするな

### 羽山好作

昔海邊の澤に、長らく住んで居る龜がありまして其の友達に二羽の鶴がありました。或る時龜は海岸の岩の上で、海の景色を見物していましたとき、ちよーど、日頃こんいの鶴が遊びに來ました。すると龜は、鶴に向て云ふことに。龜君等は翼があるから、毎日く高く空中を飛びあるいて、日本中の廣い都をも、一目に

見下し。さぞ面白いことでしょ、ついでに、友だちのよしみに、僕をつれて、空中の遊をさせてくれ玉へ」。鶴「それは君の考は、まことに無理のことである。なせなれば僕等は、羽があるから、飛ぶことは、自由自在だけれど、君は、長く水中に住ひしてるから、連も空中の見物は、六づかしい。これはみな、それ／＼の生れつきだから、あきらめ玉へ」。ど、とめましたが、なか／＼きかないものですから、鶴はしかたがなしに、一本の棒のまんなかを、龜にくわへさせて、二羽の鶴は棒の兩はしをくわへ、龜にどんな事があつても、けつして口をわいては、ならないと注意して、空中高くまいあがりやした。其のうち程なく、或る町のさんじよへゆきましたとき子供がおし、あそんでをりやした、すると一人の子供が、此のありさまを見付けると他の者までさわぎだして、わる口をいひてはやしや

した。で、龜はくやしくなつて、腹たちまぎれに、子供たちを云ひまかそとして、さきに鶴から注意された事を忘れて思はず口をわいたひょしに、からだは忽ち棒を離れまして、大地にぞーとおちて、甲もからだも、こなくにくだけて、ぞーく死にました。ですから、たれでも、自分の生つきで、出来ないことは、したがりないのがよいのです。若し無理にしたがると、此の龜のよーに、自分の命をなくすことがあります。



## 家庭

子母里そーだん、

こにし のぶはち

人類の有らん限り、無くてならぬわ良妻賢母であり

ます、勇婦烈女もないよりわ、ましたが、勇婦烈女の  
 無くてわならぬといふ時わ常に無くして、良妻賢母わ  
 常に無くてわならぬ、巴御前やヒョワンだーくを要す  
 る時わ稀にして、孟母や松下禪尼の如き母、瀧鶴臺の  
 妻、山内一豊の妻の如きわ常に無くてわならぬと思ひ  
 ます、又婦人わ自ら亞米利加を見出したコロンブスや、  
 電氣を發明したフランクリンや、蒸氣の力を發明した  
 ワットの如く大發明者たらぬでも耻るに足りませぬ、  
 婦人の本務わ此の如き大發明者を養育する母となり又  
 わ其妻となりて其事業を大成せしむるわ、自ら、種々  
 の大發明者たるに等しといふよりも更に一層重大の任  
 務なることを記憶せられ、古より良妻賢母と稱せらる  
 る人々の傳記を讀みて、自ら子を養ひ夫を助くる工夫  
 に心を用いられんことを望みます、彼の芝居を好み、  
 役者を許する外になすこと無き婦人の如きわ人の母た

り人の妻たる資格を缺るものといわねばなりませぬ。  
 又琴を弾き、茶の湯に精しく、活花を巧みにする如き  
 わ悪しといふにはあらぬぞも之を知らぬとて耻るに足  
 らぬ技と思ひます。若しそれ人情を寫せる小説を讀む  
 ことを好み、しかも裁縫の術に拙く、料理の技に疎き  
 ものは婦人たる資格をも缺くものとして輕んずべく賤  
 むべきものと思ひますわ私の誤でありしよー？

## 母と子供

### 神門 とも

どうして、子供は、あのやうに、可愛いものでしよ  
 うか、他人の子供でさへも、よき子供よりも、悪し  
 き、手の多くかゝりた方が、一層可愛い、こゝに至  
 ては、實に、造化の妙も至れり、盡せりと嘆賞しなけ  
 ればなりません。

もし、子供に、此愛らしい素質がなかりしならば、誰があゝの面倒な世話な、ことをしてやりましよう、婦人の心は、この薄弱な天真爛漫の、愛に感じ易き、小さな人の爲には、最感じ易く、殆ど其全心を占領せらるゝと云ふてもよいと思ひます。他人の子供を世話する私等でさへ、左様であれば、況や、之が眞の親子でありたならば、如何程でありましようか、然るに、不思議な事があればあるものです、嘗て、私は子供はうるさい、面倒くさい、世話なものと、つゞやく人を見ました、やうしてさやうな心になられましようか、私は、之れは、多分母親の年が若くて、餘りに自分の事をのみ考へらるゝからではあるまいかと考へました、併し子供は愛情の缺けた取扱を受けますれば、必其結果が顯はれます、又十分我身を捨てゝ愛すれば、亦之に應ずるよき報ひがありましますから、少し面倒くさいと思

ふ方は、今少し自分の慾を捨てゝ、此愛らしい、天使の如き、小さな人を面倒を忍びて、可成自ら手がけて扱てごらんない、必段々可愛らしくなりて、遂には、前と全く反對に可愛くて仕方なくなりまします、然るに、面倒だと思て之に接すれば、自然子供の心を満足させませぬから、子供も、するくなり、漸々厭はしくなりてしまひます。

二、私はこの程、或家に参りましたのに、其家に五歳になる女兒がありました、其両親は誠にやさしくて、よく子供を愛しまして、小言も餘り言ひません、勿論聲荒らゝぐることも多少しも致しませんが、然るに、其子供は、知慧の進むに従ひ、其慾望も多くなりまして。時としては止めなければならぬことも起りますので母親が、オヨシと言ひましても、イヤと云ひて續けて居りました、母は幾度言てもきゝませぬから、おど

しの爲に、カアチャンはそれぢやもう遠い處へ行て、よそのお子さんのカアチャンになります」と云ひました、又或時は、松井敏太郎さん（養女を虐待して死に至らしめたる人）を呼でくると云ひましたところが、子供は、非常にこわがりまして、直に命令に従ひました、併しかゝる止め方は、實行の出来ることでもなく、殊に松井さんと呼ぶなぞ云ふことは、子供に残酷なり、惡しき所業なりと知らせつゝも、之を現在に其愛する子供の上に、加へんとて脅かすは、不條理ではありませぬか、どうか、母たる人は、惡しきことあれば、よく言ひさかしめ、かゝる實行しがたきことを以て、虚言を教へ、殊に親の慈愛につきて、疑を懷かしむるやうのことなきやうしたいものと思ひます。

三、これも五歳の女兒でありましたが、「カアサマ、モナカを一ツ頂戴」と云ひしに、母親は之を止め、「後

になさい」と云ひしに、子供は取出し來りて私と母親の前で食しました、されど母親は止めもせず、別に言ひ聞かすことも致しませんでした。

次に「カアサマ鉛筆頂戴な、」と云ひましたのに、母親は「ナイヨ」と云ひて探し與へることも致しませんでした、此他、我に「おじぎをなさい」と云ひてもせず、そのまゝとなりました、次には、小供が視箱持出せしに、「持て來てはならぬ」と止め、書物を持出せば「その本はをもちやにしてはならぬ」とて、一々とめましたが、子供はいつも勝利を得て、母親の命令を守りませんでした、併し私は考へますのに、かく子供の慾は一つも満足と與へず、その上に止めずともさまで害なきことまで制したならば、子供がもし正直に従ふものとすれば、全く束縛せられて、何事もすることは出来なくなりすから、詮方なく、母親の命令に背き、其

意志を通すことになりたのであります、けれども、子供には一旦命じたることは、必ず守らしめざれば、遂に不従順なる習慣を養ひますから、子供には可成大様に、子供相應の慾望は之を成就せしめ、命令はなるたけ少くして、大切なることばかりに止めたいものです。

嗚呼右にある如き扱ひを受くる子女の不幸さよ、此の子供の母親も、實に子供はうるさいものと云ひたる一人なりき。あわれ、後の妨害とならざる限は、餘計なる命令を下さずして、後の爲よからずと思ふことのみ止め、一旦止めたらば、必之を實行せしめられなば、遂には従順なる習慣を得て、うるさからぬ、よき愛らしき兒となりましょう。

實に子供は無邪氣なるもので、何も知らぬものではありませんが、恰かも水の如く、威愛宜しきを得ざる人

には、之に應じたる處置を取るものです。

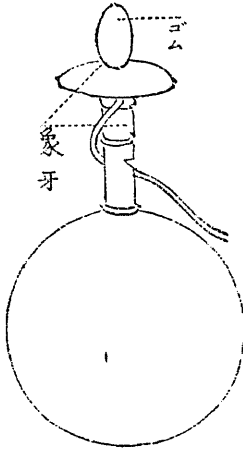
## 育兒のはなし

波多野とく

小兒を育つることに就きては書物をもよみ又人にも聞きたりしが其説ける事は果して實行し得らるゝものなやと己れの小兒につきて試みしに或は成功せしこともありあるは又失敗せしこともありき世の母人の參考にもとその一、二つを述べん

一、乳汁を吞ましむる事、生後しばしは何物をも與へず五六時間の後始めて己の乳を吞ましめ爾後二時間を隔つる毎に與へ一週間の後に至りては二時間半とし漸次其間の時間を長くして五週間の後には五時間を隔てゝ與へたりされば朝七時に充分に吞ましめ置けば正午までは少しも乳を求むることなく正午頃又

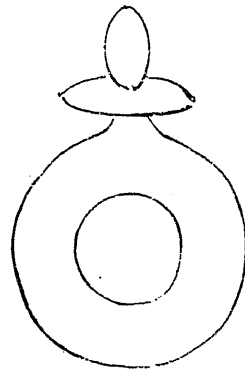
充分に吞せしめば午後も五時頃まで與へざるもなほ  
おとなしく遊びたり斯く習慣をつくるまでは小兒は  
尙時々乳を吞まんとし或は半ば眠りし時などは口淋  
しささやをせしことありさかゝる時はいつもおしや  
ぶりを與へき小兒はさまで空腹なるにあらざればよ  
く之に満足して眠りたりそのおしやぶりの形には種  
々あり其中



この圖の如き  
筒のあるもの  
は軟弱なる小  
兒にはその先  
重く且紐にて  
結べるが故に

時々乳首の部のゆるむことありて便利ならず己れの  
用ゐて衛生上、便利上尤もよかりしは左の圖の如き

形にて各部とも皆護謨にてなれるものなりき之を度  
々沸養して用ゐしなり



かく時間を隔てゝ規  
則正しく乳を與へし  
爲に乳は充分に溜り  
小兒は満足する程に  
吞みしかば睡眠中も

目の覺ひる毎に乳を求むることなくかつ便通も幾分  
か規則正しくなりて赤兒をもてる割合には親もよく  
眠ることを得たり然れどなほ時々目を覺して泣き  
出づることありしかば務めて夜十時頃より朝五時頃  
までは乳を與へずして通して眠らしめんとしたりし  
もそは遂に成功せざりき

一、抱きわけざる事、小兒は兎角抱かるゝことを好む  
ものなれば抱かずして育つることは到底出來がたき

ものなりとは豫て聞き居りしことなれどこれも必ず習慣なるべし試みばやとて生れてより乳を吞ましむる時の外はすべて抱きあげざることにし常に床の上に臥せしめ天井より花輪を釣して之れに長き糸をつけ置き傍にて裁縫し或は讀書しつつ時々この糸を引きて花輪を動かしむその動くを見て小兒は喜びて往々聲を發することもありきかくして勞るれば花輪を見ながら眠りにつき覺ひれば復これを見て遊べり其間たま／＼便の世話をなすのみにて手間をとらざるが故に忙しき身にはいど／＼便利に感じたりき小兒はまた充分に身體をのばし得るを以て骨骼の曲る憂もなく發育も充分ならしむることを得べしさて今日に至るまでこの習慣ありて始めは己れの膝にて眠るもしばしの後には窮屈を訴ふるが如く平臥せしむればさもこゝちよげに熟睡す且又始めより抱き寐を

せざりしため今に至るまで一人にて眠ることゝ心得居るものゝ如し乳を吞ましめ終りて床上に横たふればそのまゝ直に眠るなり

一、毎日入浴せしめし事 赤兒生れてより身體に障りなきかぎり一日として入浴せしめざるることなかりきかくて小兒の皮膚の機能の活潑なる爲かいと發育よくおしなべて風邪に犯されざりし様覺ゆるなりされば毎日のことゝて世話多きやうなれど結局は却て手のかゝらざるの利益ありき

一、玩具の事 小兒は何にても嘗め易ければ色のはがるゝ玩具は一も之を與へずたい左の種類のものにて毎日よく遊びたり

護謨犬、瀬戸犬、太鼓、簡單なる書本護謨鞆

右の中護謨犬と瀬戸犬とはよく沸養して與ふことを得しを以て當る時期には尤も重寶なりき書本は小

兒の甚だ好むにも拘らず適當のものなきに困しめり  
 以上は生後一年半までの小兒につきての経験なり



消えぬ記憶

ひさ子

前號家庭の欄に、子供は印象を受けることが、蜜蠟のやうで、これを永く保つことは、大理石のやうであるといふことがございましたが、誠に其通りでございます。

私が九歳か十歳の時に、夏の或日、家内中で、川原にあそびに出かけました。さうすると、一人の男が、大急でかけてまゐりまして、

向の川の中に、子供が死んで居る。

と申します。私は、何だか氣味がわるくなりましたがそこが所謂、こわいもの見たし。で、兄についてかけ

出しました。さて行て見ますと、果して四歳位の男の子が、白い浴衣を着て、川の底に仰向に横つてあります。そこは、水が極淺いものですから、ありくと死顔までが分ります。此時、私はまだ子供ながらに、一種いふにいはれぬ感を起しました。

此時の、川の其邊の様子、死兒の衣服、死顔、及見た時の感じは、今にせうしても忘るゝとができません。

又私の友人、これは八歳位の時に、冬の或朝、

向の御社の便所の中に、人が首を縊てあるそつだ。

といふことをききました。そりやこそ。といふので、

これも兄さんと一しよに、かけ出しました。そうすると、

其首くゝりは、もはや便所の中より出され、土の上に置かれてありましたが、そこで怪我をしたと見えて、

頭には血がついて居り、をりしも積つてある雪に、にじんでをります。これで、十分、こわい、といふ心

起しましたのに、そこに居つた巡査がたはひれに、  
今夜はいかりに行くと、此人が出てくるぞ。とお  
どしました。

さあそれからといふものは、はいかりに行つた時に、  
此事を思ひ出して、こわくてたまりません。いまはも  
うこわくはありませんが、それでも、其時の様を、あ  
り／＼と目に見ることができると私に話したことが  
あります。

右は二とも、變死者を見ました、いやな話ですが、友  
人も私も、十六七年前に見たことを、今もなほありわ  
りとおぼえて居る、といふのは、全く、まだ軟く弱い  
心に、深くきざみこんだからであります。

して見ると、まだ幼い子供の心は、まるで蜜蠟のやう  
なもので、どんなやうでもきざみこむことができます  
す。そうして、大きくなるにつれて、心はだん／＼か

たまりますが、此もやうはなかなか消えません。こと  
によると、死ぬまで消えぬかもしれせん。此點から  
いふと、なるほど子供は大理石です。即ち、小さい時  
に、つよく感じたことは、よかれあしかれ、いつまで  
も忘れせん。深くきざみつけた記憶は、容易に消え  
ません。また、これはどきどきに、しみこんだ記憶を、  
かげも形もないやうに消す、といふことは、實に六か  
しいことでございます。それも善いことならば、どに  
かく、もしも、子供の心に、いれてよくないことであ  
つたならばどうでせう。

そこで、こういふことが分ります。それは、「まだ心  
の軟弱な子を、あまり強く刺激したり、ひどく感情を  
起させたり、することは、よく／＼考へなければなら  
ない」といふことでござります。

婦人<sup>ふじん</sup>と子どもといふわかりよき表題<sup>ひょうだい</sup>にてものした  
ゝめられたるふみを見て取出<sup>とりだ</sup>しつる御馳走<sup>ごちそう</sup>の一種<sup>いっしゆ</sup>  
は婦人<sup>ふじん</sup>と子ども<sup>こども</sup>の口<sup>くち</sup>にかなふべきか

昔<sup>むかし</sup> 今<sup>いま</sup> いろは料理

## 石井泰次郎寄稿

伊勢豆腐<sup>いせのとうふ</sup>の拵<sup>こしら</sup>へやう

薯蕷<sup>やまのいも</sup>をおろして鯛<sup>たう</sup>を三枚<sup>さんまい</sup>におろして身<sup>み</sup>を庖丁<sup>はうちやう</sup>刀<sup>やう</sup>にて  
搔取<sup>かきと</sup>て、すりい者<sup>ぶん</sup>三分<sup>い</sup>の一<sup>い</sup>入れて豆腐<sup>とうふ</sup>に玉子<sup>たまご</sup>の白味<sup>しろみ</sup>を  
加<sup>く</sup>へすりて何もかも一ツ<sup>ひと</sup>に能<sup>よ</sup>くすりまぜて杉<sup>すぎ</sup>の折<sup>やう</sup>に布<sup>ぬ</sup>  
をしきてつゝみて湯煮<sup>ゆに</sup>をして、取出<sup>と</sup>り切<sup>き</sup>て、葛<sup>くず</sup>だまり  
をかけて出すべし

葛溜<sup>くずだまり</sup>は葛粉<sup>くずこ</sup>を水<sup>みづ</sup>にてときてちりを去<sup>さ</sup>りて、鍋<sup>なべ</sup>には鯉<sup>かつを</sup>  
煎汁<sup>だし</sup>を煮<sup>に</sup>立て醬油<sup>しょうゆ</sup>をさしたるものを仕立<sup>したて</sup>おきて、右<sup>みぎ</sup>  
の葛粉<sup>くずこ</sup>を入れながら搔<sup>か</sup>まはしてつくりたるものなり  
又鳥<sup>またどり</sup>みそ、わさび味噌<sup>みそ</sup>などかけていよくよし

鳥味噌<sup>とりみそ</sup>はつくり方<sup>かた</sup>いろゝあり、其<sup>その</sup>一つをあぐれば  
何鳥<sup>なにどり</sup>にても身<sup>み</sup>をつくりて酒<sup>さけ</sup>にてよく煎<sup>い</sup>りて、ひやし  
て冷<sup>ひ</sup>えたるを能<sup>よ</sup>くすりて、味噌<sup>みそ</sup>を等分<sup>おなしほ</sup>に合<sup>あ</sup>せて、又<sup>また</sup>  
摺合<sup>すりあ</sup>せて、馬尾<sup>うみなう</sup>篩<sup>ふる</sup>にて濾<sup>こ</sup>して、水<sup>みづ</sup>にてゆるめて鍋<sup>なべ</sup>に  
入<sup>い</sup>て煉<sup>ね</sup>りてつくるべし

“ Wohlgeschmack bringt Bettelsack. ”

美食<sup>びしょく</sup>を欲<sup>ほつ</sup>する家<sup>いえ</sup>には乞食<sup>こつじき</sup>の面桶<sup>めんづ</sup>來<sup>きた</sup>る。

女兒<sup>ぢよ</sup>の袴<sup>はかま</sup>

育兒女

近來<sup>ちかごろ</sup>、女服改良<sup>ぢよふくかいりやう</sup>の一端<sup>いったん</sup>として、廣<sup>ひろ</sup>く袴<sup>はかま</sup>の行<sup>おこな</sup>はるゝに至<sup>いた</sup>  
りたるは、喜<sup>よろこ</sup>ばしきことゝ云<sup>い</sup>ふべし。然<sup>しか</sup>れども、其用<sup>そのもち</sup>  
ゐらるゝ精神<sup>せいしん</sup>は、衛生<sup>ゑいせい</sup>に叶<sup>かな</sup>ふども、之<sup>これ</sup>が使用法<sup>しやうほう</sup>を誤<sup>あや</sup>り  
なば、可<sup>あた</sup>惜<sup>そ</sup>其効<sup>そのくち</sup>を没<sup>はつ</sup>するに至<sup>いた</sup>るべし。例<sup>たと</sup>へば、彼<sup>か</sup>の四

五歳の未だ歩行も確かならざるものに、従前の如き廣帯をしめさせたる上に袴の紐もて七重八重に胸高く結び上げたるは、發育上の妨害となるのみならず、外見も却て愛らしからず、寧ろシゴキ位に止めて其上に前回掲げたる袴代用にもなるべき大なる前掛を用ゐるに如かざるなり。然れども、稍成長して小學校に通學し得るに至らば、彼の運動の際脛の露出するは見苦しければ、帶なぞ高くしめざるは、勿論可成手輕きものを用ゐて、餘りに胸高に堅くせざるやう注意して用ゐざるべからず。

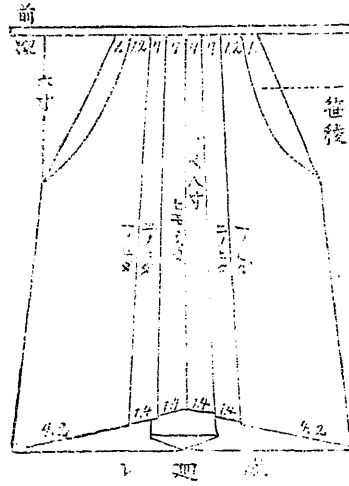
今左に巾二尺の布を以て、十一二歳の女兒の襦袢なき袴に付きて記さん。

縫方 初め、後布と後布、前布と前布と、を縫ひ合せて次に前布と後布を左右とも縫ひ合せて相引をなし、其の折は前の方に附く、次に蹴廻しを三つ折紵になし、(或

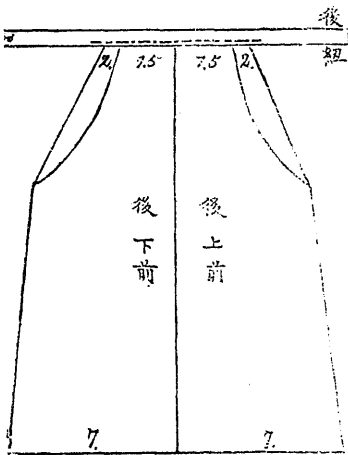
は裏をつくるも可なり) 次に後の稜は(一)或は(二)何れにても其好む處に従ひて圖に示したる寸法により折を附くべし、今(二)を用ゐるとすれば、後布に折を附くる圖の如く後を折りて中央の稜は右を上とす、後面を全く摺みたる後に前面を圖の寸法によりて折附け、次に前後の笹稜を取りて後、前紐、及後紐を附べし。飾糸は太白糸を以てし、厚紙に眞綿をくるみたるを紐と共に圖の如く始めに縫ひ置くものとす。

袴の地質及色合は、強て今日の普通にも用ゐらるゝ如きカシユミヤの海老茶にも限るまじ、寧ろ本邦所産の地質にて色は其人に相當したるを撰み、稜の如きも漸々小供は小供らしく、大人は大人に似合はしきを取りなば、管に衛生上の効をおさむるのみならず、裝飾ともなるに至らん、進みて研究したまへかし。

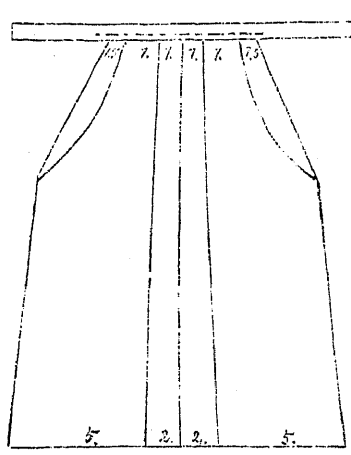
(面 前)



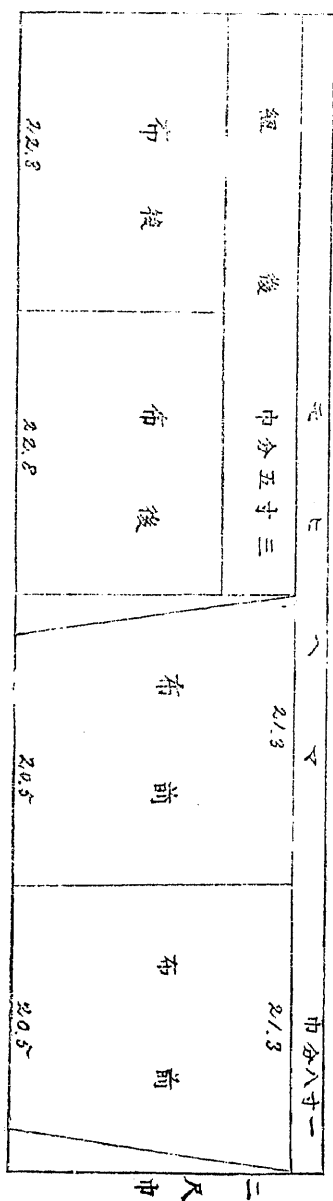
(二) 面 後



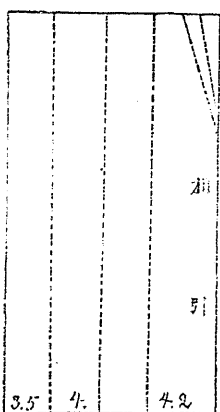
(一) 面 後



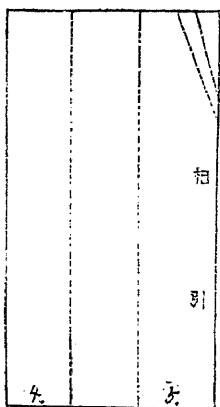
# 積方及裁方



前布に折を附くる圖



後布に折を附くる圖



# 印度々人の家庭生活 (承前)

## Y. I.

顧へつて印度人の生活ことに家庭生活の狀態を見ますと凡ての事は皆宗教として崇められたる古き習慣によりて規定せられてゐまして之を變更するのは大變の不敬事として恐られて居ます夫で今こゝにその一斑を述べて見ますればその改良進歩のどれほど困難であるかを認めることが出来ましょう。

先づ印度の家庭は集合組織なので殊に中以上の家庭に於てそうなのです。

男兒は家庭で成長した後其職業のため止むなく他所に轉居するものゝ外は兩親と同居するのが常なので兩親兄弟の外にも甥とか従弟などの同居することは少しも珍らしくはありませんまた印度人は凡て極々年少のときに結婚する風習がありますが男兒ならばまだ

學校通の生徒の時女子ならば十二歳以前にしますのでから男兒は結婚後多年を経ればその妻を扶助することも出来ず又妻たるものもまだ小兒ですから齊家の道を教へなければならぬのでございます。

印度では富豪なる家庭に於ましても一家の主婦たるものは家事を親くなす風習でございまして若し婢僕を使用することがありましても至て少數です家事の下働きは大抵同居して居る貧乏な親戚の寡婦とか子女になさしめるのでございます。

印度の高貴なる階級の家庭の有様は大抵かようなものでございますたゞその富と人數との多少によりて少しは差がある許りです。

夫から印度人は非常に早起する人民でして婦人は日の出づる二時間前に起出て涼く快よき間に家事の重な仕事をなし終はるやうにして居ます。

又家族の食料のために粉を挽くことは婦人の仕事の一つとなつて居まして二人の婦人は向ひ合つて土間に坐つて可笑うたをうたひながら重い石臼を挽いて居ます又最寄の井戸とか河から水を汲ひこども婦人の務の一つですが之れは至極愉快な務でございまして、見て居ますといふと澤山な婦人は長い隊を作つて各水甕を恰好よく頭の上にのせ隊長の先導に従ひ一列になりて進んで行きますが水邊に到りますと近隣の婦人等は皆集つて來まして互に挨拶をしましてお互に耳新しい咄を持ちよつて例の井側會話をなすものもあり又冗談を云つて笑つて見たりして居ますがこれは確に一日中の最も楽しい時間の一つであるのでございします。小兒も同じ様に河母に伴はれて小さい水甕を携へてして之れに水を入れ大切に於て家に運ぶことを大なる樂として居ます。

夫から高貴の階級の人民はまことに嚴重に清淨を好むのです、そうですから一日のうちにも洗ひ淨めることは數知ぬ程ですから其使用する水もまことに、澤山です。

又印度の婦人は同じ綿服を二日間洗はずにつづけて着ることは決してありませぬ而して洗濯は大概家族内の婦人にさせて居ます。

この婦人達は飲用水を汲みに行く處から少し隔つた水邊に行きまして洗濯をしまして夫から歸つて來て臺所や食堂などの拭き掃きをするのです。(未完)

大和田建樹君編

歌まなび

世に作歌の指南を爲すの書多しと雖も或は繁に過ぎ或は簡に失し其中を得たるもの少し「布留の山踏」「和歌初學」の如きものあれども既に陳腐に屬せんとするの今日この書出でたるは和歌初學者の暗夜を導く電氣燈とも謂つべし部類は四季雜に分ち題毎に親切なる説明を附し用語句を列舉し終に豊富なる古今名家の作例を與へて模範を示せり

全壹冊 洋裝背皮金  
大字凡紙數  
頁美一本千  
二月本旬  
發兌

博文館發兌

大和田建樹君著

散文 韻文

深山櫻花

洋裝袖珍 全壹冊

正價金四拾錢 郵税金六錢  
正價金卅五錢 郵税金六錢

發兌元 東京 博文館

此廣告依御注文の方婦人の子供を見を御附記を乞ふ

女 子 之 友 記 者 編 纂

# 東洋女子叢書

全拾冊 ● 每冊二百五十五頁以上 ● 日本綴體裁優美

本書は東洋古來の女訓書を網羅せる者にして日本婦人無二の寶典なり唯一の女  
學史料なり苟も教育ある貴婦令嬢の座右苟も教育ある家庭の几邊必一本を備へ  
ざる可らざるは勿論公認諸學校倫理修身の參考として各一部の備付を要す尙本  
書は體裁の優美高尚なるを以て黒棚の置物或は贈物に宜しく各女學校賞與本と  
して道良也

## 第一編 再版

定價金四拾五錢  
郵税金六錢

◎本

朝女

鑑

(十二卷)

淺井了意著

◎女

小大

學

(二卷)

◎女

今川(二卷)

## 第二編 既刊

定價金四拾五錢  
郵税金六錢

◎假

名

列

傳(八卷)

北村季吟著

◎難

波

江

(二卷)

樂亭かなな筆記(一卷)

松平定信著

◎庭

訓

抄

(二卷)

阿佛尼著

伴蒿蹊抄

## 第三編 既刊

定價金四拾五錢  
郵税金六錢

◎女

女

四

書(七卷)

辻原元甫著

◎女

郎

花

物

語

藤原氏女著

◎乳

母

文

群

類

阿佛尼著

◎乳

母

草

紙

(二卷)

著者不詳

## 第四編

二月十日發賣

定價金四拾五錢  
郵税金六錢

◎つばのいしぶみ

(十三卷)

發 行 所 東 京 市 神 田 區 東 洋 社

(中付の二)



## 學 術

機關車の後押し

關本幸太郎

其一、二人の少年問答のこと、

二人の少年鐵道線路の附近にて遊び居りしに、轟々と音して汽車の走り來るに會せり。偶と見れば二輛の機關車、重荷積み上げたる長き列車の一つなぎを引き居るに、甲少年聲を擧げて

甲「オイ見給へ機關車が二つだ」

乙「あの一つは破損れたから引ッ張られて居るのだ」

甲「何にそーでない。其證據には二つとも立派に煙が出て居るではないか。僕は兄さんに聞いた、二つで

引くと速いぞ」

乙「馬鹿云ひ給へ、二つで引いて何が速いか」

甲「二つで引くのは、一つで引くより速いのは當り前でないか」

乙「君は考へないからいけない。あの二つの速さを比べて、前のが後のより速いとして見よ。そーすると後のが前のに引ッ張られるばかりで、少ツとも役に立たないでないか。まだ邪魔になるさ。又た後のが前より速いとして見よ。前のが押される許りで矢ッ張り駄目だ。二つが同じ速さなら損はない代りに得もないぞー考へてもいけないさ」

甲「ウーン……けども僕は矢ッ張り二つの方が速いと思ふ。實際二つに引かして居るのは得があるからに違いない。損があつても得のないものなら、何故二つに引かすか、譯がわからないもの」

乙「ウン……それでもなせそーか、君のには理屈がないじやないか……」

甲乙二人は五里霧中に迷ひぬ。

甲「あした學校で先生に聞いて見やう」

乙「あー、きつと聞いて見やう。僕のはどーも理屈があるがな」

時に瀛車は遠く去りて影もなく、黒煙一抹僅かに名残を止むるのみ」

讀者は甲乙二者の説の、何れを可とし、何れを否とするか、明日先生の説明あるに先ち、豫じめ考へ置かれよ。

## 其二、教師説明のこと

地軸一回轉、あすと呼ばれし日も、愈よ今日とはなりぬ。扱ても彼の二少年は登校するや、打ち連れて教師の前に出て、昨日問答の顛末を述べて判斷を請ひぬ。

師「莞爾として説いて曰く、

教「乙さんの考は一寸面白い様であるが、實際と違つて居る。元來自然界の現象を説明したり、又は、其規則を見附け出すには、よく自然を觀察して、多くの事實に通じたものを取らねばならぬ、机上の論ばかりではいけない。所で今舟を漕ぐ場合で考へて見るに、漕ぎ手に異りが無いものとすれば、漕ぎ手の多いと少いで、速さに違ひがあるかどうか」

乙「艦數の多いほど早いです。漁夫が多勢で漕いでるのを見ましたが、非常に早う御座いました」

教「ボートの時を知つて居るか」

甲「矢張り艦の多いのが早いのです」

教「其通りだ。今二人で漕いで居るとして、其内の一人の漕ぐ早さは、他の人のより遅いとする。其時に遅い人の漕ぐのは何の役にも立たないか。乙さん瀛車

の場合と比べて、それ丈け違うか、どーです」

乙少年は小首を傾けて考へたる後ち、

乙「どーも違いが無い様です」

教「先きに私が實際を見ねば、眞實の所を知る事が出来ぬと云つたのは、このととです。或は何の役に立たないかも知れぬが、又大に役立つかも知れぬ。役立つか、役に立たぬか、之を決めるには思案した許りでは仕方無い。實地に試めして見ねばならぬ。箱の内に物が有るか無いか、わからない時には、いくら考へても知れはしない。萬一云ひ當てたら、夫れこそまぐれ當りだ。眞にあるなしを決めるには、箱の蓋を取つて調べるに若くはない。丁度夫と同じ事で、あなた方の争ひも實地に試めした後ち黑白を定めねばならぬ。所で舟の場合では、二人漕げば二人丈けのきゝめがあり、三人漕げば三人だけの効能ある事は、既に知

つて居る通りだ。唯に舟のみでない。學者が色々のもので精密に試めして見たけれども、皆舟の通りである。漕車も一つにつながつて居るのだから、舟と同じ事で、機關車が多いほど早く走るわけだ。此理屈をば、ニウトンといふ英吉利の學者が、二百年程前に世間へ發表した。其意味はこうです。

一つの物を動かす爲めに幾つかの力が同時に働く時は、皆夫々十分に効能がある。外に自分より強い力があるから、自分の力が無効になるといふ事は決してない。そうして同じものを動かす時の速さは力が大きいほど速い。

之から考へると、すつかりわかりませう。

甲乙「わかりました。」

(終)



## 講義

### 育兒學（續）

中村 五六

### 第三章 幼兒の營養

●生母の乳、幼兒は生れて二三週の間は始終眠るのと乳を飲むの時に時を過ぐしまして、乳を消化し身體の養を取り不潔物を排出するの外、何の働きをもいたしませぬ。故に幼兒には、身體の營養を取り發達を遂げ、且つ日々の消費を償ひまする資料を正しく與ふると、第一に大切なることであります。幼兒生れたるとき暫くの間は、乳を飲ましむるの要はありませぬが、母親の氣分も稍快復いたしたるとき、即ち通

例十時間内外の後に、始めて之を與へます。

母の乳は、初は其の質水多く、且つ出づる分量も少く、兩三日にして漸く濃くなり、分量も多くなります。是れが自から幼兒の必要に適ひて居ますことは、實に嘆賞の外ありませぬ。其の譯を申すは、幼兒の生れたてには、腸の中に蝦糞と申す不用のものがありますれば消化の働きを遂げんには、之を排出しなければなりません。最初に出づる水多き乳は、下劑の効をなしまして、一日若しくは二日にて蝦糞を全く排出して仕舞ひます。母の乳が追々濃くなり、養分の富むに従ひまして、幼兒の胃も腸もよく之を受け又よく消化するやうになります。

斯く蝦糞を排出するに、自然の妙法あるに拘はらず、特更にさくりなどを與へまするは、先づ無用のことたるのみならず、時によりては害を引き起すと云ふこと

でありますれば、乳の外に何かを與ふべき要ある折には、醫師の指圖を受くることが安全の策と思はれます。

母親の健康宜しからずして、乳出でざるときにも、猶は幼兒に乳房を授けますれば、自ら出づることがあります。若し乳愈々出でざる時には、成るべく生母の乳に似寄りたる營養品を與ふことが大切です。困て此の場合には、先づ適當なる乳母の乳、次に牛乳等を宜しといえます。

●授乳の時 幼兒の胃が乳を消化し得るには、凡そ一時四十五分を費すと申しますれば、乳を與ふるに最も注意すべきは、分量を過さず、二三時間位間を置きて飲ましむべきことです。一杯の乳もよく消化いたしますれば、胃が消化し能はざる時に於ける二杯の乳よりも、多分の營養を生ずるものであります。然る

に、幼兒が泣くときは、其の原因如何を問はず、又場所をも構はず、直に乳を授くる母親あるのは、實際に少からぬやうであります。全體幼兒が泣くは、必しも空腹の爲にあらず、其の感覺鋭くして、熱さ寒さによることあり、衣服の緊り過ぎたるによることあり、同一の位置に長く臥して體の一部が壓さるゝによることあり、抱き矩合のよろしからざるによることあり、まばゆき光線、やかましき音響によることあり、或は却て乳を飲み過ぎしによることあり、其原因は何にしても不快の感を起して、之を示すは、常に泣くといふことになりす。

そも、幼兒に乳を與ふるは素と之を養ふが爲にして、其の泣くを靜むる目的でありませぬから、泣く度ごとに乳房を含ましむるは、其の法に合ふものとは申されませぬ。幼兒の泣くは時には運動となるの利益も

ありまして愈々害となりまするは、屢々にして長く續き、又眞に苦痛に因るときであります。泣く中に害となるものと、ならざるものとの區別は、容易く分りますれば、永く兩者を相混じて同一のものと思ひまする母親は、至て少からうと考へます。

幼兒に乳を與ふるに、一定の時によらずして不規則の習慣を附くるときは、母は晝間に於ては其の仕事を妨げられ、夜分に在りては安眠をなすこと能はず、誠に煩勞に堪へざる次第に立ち至ります。しかのみならず、頻々多量の乳を與へまするときは、胃は之を消化する力ありませぬ故、乳は胃中に腐敗して、吐出或は腹痛下痢等を發するの恐もあります。されば、晝間は二時間若しくは三時間に一回づ、夜分は四時間若しくは四時間半に一回づ、規則正しく乳を與ふるやう、最初より習慣を附くことは、幼兒の爲に又母親の爲

に最も必要のことゝ存じます。

●乳を與ふる母親の注意 幼兒に乳を與ふる

母親は、常に其の心の平安を養ひ、其の身體の健康を保つことは、極めて大切のことであります。母親の精神平安ならず、身體健康ならざるときは、乳の性質を變じ分量を減ずるものであります。されば、務めてはげしく感情を動かすことなく、心は常に平かに樂しくして、憂に沈み怒を發するやうのことなく、又食物宜しからず、運動十分ならず、不潔の空氣を呼吸し、不足の睡眠に陷る等のことありて、其の健康を害ふやうのこどなきごとく注意あらんことを肝要といたします。

生母の乳が子どもに取りて最良の食物たることは、申さずとも既に明かなることと思ひますが、母が其の子どもに乳を與へて、自分の身體も之が爲に藥に勝る利益

となります、是れ乳を與ふるが爲に、産後の本復を易くし健康無恙を來すによる譯でありまして、若し哺乳の役をなさなければ却て、分娩にて變化を受けた子宮に病を醸し、或は全身倦勞を生じ心地あしく胸塞り、とかく病を起し易くなりす。故に母親が其子に乳を與ふるは、自然の約束とは申しながら、母と子との兩方に利益あることであります。されども、母の身體の質により、或は病氣の模様にて、其の乳惡しきことありますれば、之を與へて母子共に健康を害し、病に罹るの不幸を見るに至ることがあります。されば乳を與ふべきと、與ふべからざるとの鑑別は、最も大切のことでありますれば、今注意の爲左に與ふべからざる場合を擧げて置きませう。

○乳の出づる分量極めて少き時○乳の成分の不完全なる時○乳房に病ある時○神經病に罹れる時○肺結

核及び梅毒を病める時○熱性病に罹れる時○再妊娠の時○甚しく貧血なる時。



## 史 傳

藤田東湖の妻里子 (ついで)

下村三四吉

健が東京より郷里水戸にかへるや、茨城縣警部長の職を奉じけるが、幾ばくもなくして、同縣の書記官に進み、老母の孝養をすます怠りなかりき、然るに、里子は、多年心身勞苦の結果にやありけん、十八年の春輕症の中風にかかりぬ。容態さしてかはりたることもなければ言語は甚だ鈍くなりぬ。かくして二十一年の初夏に至り、また瘧疾に胃され、癒えては病み、病み

ては癒ゆること五六度に及びたため、身體大に疲勞し  
けり。されど體質も極めて強健なりしを以て、ほど  
なく少快に赴きぬ。

翌二十二年二月十一日の紀元節は、千歳不磨の大典  
たる憲法の發布ありて、我が國立憲政治の基ここに成  
りぬ。この時、明治維新前後勤王の諸名士に贈位の恩  
典ありけるが、里子の亡夫東湖も積年の忠誠によりて  
正四位を贈られたり。東湖の光榮はいふもさらなり。  
病床に在りし里子のよろこび想ふべし。

里子の榮譽と歡喜とは、これに止まらざりき。この  
頃、里子の生家の甥なる山口正定は主殿頭を承りて  
宮中に奉職しけるを、畏くも 皇后陛下召させられ  
て、「東湖の妻今なほ存生せりと聞く、艱難の間貞操を  
まつたて今に至りしは、めでたき限りなり、定めて齒  
も傾きしならん、能く保養すべきよう慰めよ」とて、

白縮緬一匹を下し賜ひぬ。つぎて、二十三年一月 聖  
上 皇后兩陛下茨城縣下へ行幸ありけるとき、東湖の  
父(名は一正號は幽谷)及び東湖が王事に勤勞せしこと  
を叙賞あらせられ、祭料として金二百圓づつを賜は  
りき。さて、また、 皇后陛下には、里子にも拜謁を  
賜はるべき恩命ありて、特に御休憩所なる好文亭に召  
させたまひぬ。里子は恩遇身に餘りて感涙にひせび  
けれど、去る二十一年夏の病氣このかた歩行も心にま  
かせざる程なりしかば、本意なくも辭し奉りぬ。よ  
りて、陛下には、行在所へ御還啓の後更に健を召させ  
られ、「今日は母を見ましく思ひて、呼びたれども病氣の  
よしにて本意なかりき、よく養生せよ」とて、白絹一  
匹と金百圓とを賜はりき。聖旨の優渥、藤田氏の世に  
稀なる光榮、たたへんやうもなし。

二十四年の秋に及びて、健は宮内省に召されて、諸

陵頭を奉職するとなり。全家再び東京に移りき。その十二月には、幽谷の生前の志業を賞して正四位を賜らせたまひ、東湖の庶子信(通稱小四郎)もまた從四位を賜られき。積善の家餘慶ありとの語ここにその實例を見るべし。

これ等の恩命ある毎に、里子は、感泣の外なかりしが、二十五年六月には、更にこの上なき光榮を受けき。その十九日墨田川にて海軍短艇競漕會ありしとき、皇后陛下行啓あらせられ、小梅なる徳川侯爵水戸家の館を御休憩所にあてたまひぬ。このをりを以つて、陛下には、「東湖の妻はこの近傍に住めりと聞く、今は身體の少しにても快からんには、見なくほし」といとも畏ぎ御命あり。里子は長らく起居不自由になりたれど、一昨年水戸にて御沙汰を蒙りし時よりは、少しく輕快を覚え、かつは、度々の恩命願ふともかなふ

べき事ならざるを以て、人々に助けられて、小梅の邸にまゐり、皇后陛下に拜謁しこのたびもまた御金五十圓と白縮緬一匹とを賜はりき。實にありがたき限りなりけり。

年來幾多の困厄に堪へて、綽々として養裕ありし里子も、寄る歳波と病魔とには敵し得ず、同年の秋より病勢次第に重り、冬に及びて、ますますはげしうなりぬ。終にその十二月廿二日といふに、子女に枕頭を擁せられて、永眠に就きけり。里子の光輝ある生涯ここに終りを告げぬ。享年七十八歳。

○附けていふ。本篇の事實は、健氏が母里子の喪中にその行實を記述したる「血涙餘滴」といふ書に據りたり。原文質實にして飾らず、しかもよく詳細の事情を悉くし、至情のこもれるところ、人をして感泣に堪へざらしむ。されば、余もつとめて

無用の形容を避け、その事實の概要を紹介せんて  
とに心を用ゐたり。もとより精彩に乏しき筆つき  
はために一層の枯燥を加へぬ。讀者幸に文華の  
如何を問はずして、この家庭に於ける婦人の模範  
の行實を反覆玩味せられよ。

ローランド夫人 (つゞき)

鄭 越 生

一千七百八十九年五月五日、時のふらんす國王、るい  
十六世は國會をヴェルセル宮に開き、財政整理の策  
を議せしむ、是よりさき、十六世王は痛く、國家財政の  
紊亂せるを憂ひ、ターゴ、ツッケル、カロンヌ等を  
登庸し、相つぎて、その整理に任せしめたれども、一  
として成效せしものなく、こゝに至り、竟に破産の極  
に達しければ、事局の救済を輿論に問はんとて、かく

は國會を召集したるなり。

國會議員の總數は、一千二百十四人、その内貴族二  
百八十五人、僧侶三百〇八人、平民六百二十一人なり  
開會第一に、貴族僧侶及び平民派の間に、議事の方法  
につきて、意見を異にし、紛々決する處あらず、平民  
派は飽迄その主張を貫かんとて、自ら、議會を組織し  
國民議會と稱して、單獨に議事を進行し、其勢甚だ  
盛んなり。

平民議員の勢力かくの如く、遂に貴族僧侶の輩を壓  
倒したるを機とし多年怨みを飲みて、貴族等の專横を  
怒りつゝありし、平民の公憤一時に暴發し巴里と云は  
ず、地方といはず一揆徒黨至る所に蜂起し、或はバス  
チール獄を破壊し或はヴェルセル宮を攻撃し、紛亂  
殆んど名狀すべからず。

一千七百九十一年九月國民議會みづから解散し、新

憲法の規定により、更に立法議會を開き専ら國政を議す此の議會に於て政黨明に分れて三派となり各旗幟を立てゝ相下らず。

三派とは曰くギロンド黨、曰く山嶽黨、曰く平原黨是れなり。

その議員の多數がギロンドより選出せられたればとて其地名を名に負へるギロンド黨は甚だ溫和なる共和政治を主義としブリソー、バルボア、ヴェルニア等其領袖たり。

議會に於ける彼等の議席が高所なればとて其黨名となせる山嶽黨は最も過激なる主義を抱持しロベスピエール、ダントン、マラー等之を指揮す。

平原黨とは其議席の住地より山嶽黨に對して命名せるなり此黨派は甚だ微弱なるものにして、何等の勢力なし。

山嶽黨の主義は急激なり、秋霜烈日の如き、一刀兩斷革命の實を擧げんとす。ギロンド黨の主義は溫和なり、霽然たる春風の如し、着々として其實績を收めんとす、今や佛蘭西全國の精神たるべき、立法議會は、その主義に於て、斯くの如く反對の甚だしき、二派の抗争する所となりぬ。

佛蘭西革命の性質は、立法議會に於ける二派の勝敗に由りて直ちに豫期するを得べし、若し山嶽黨にして優勢を占めんか、來るべき革命は極めて峻惡なるものならざる可らず、願くばギロンド黨をして、議會に勝を占めしめ、以て溫和なる革命を遂げしめよ。

ローランド氏は、はじめ、リヨンの選舉區より選出せられて、立法議會に入り、籍をギロンド黨に列したりしが、次第に勢力を得、一千七百九十二年、遂に推されてその首領となる、是れ氏が天性稟有せる、政治

上の才幹によりてしまひしなれども、然れども、夫人の内助、大いに與かりて力ありしは疑ふ可からず。

當時夫人は、如何にもして、温和なる革命により、現下の問題を解決せしめんと欲し、常に其良人に侍して、内外の政客に接し、革命は止む可らず然れども、急激なる革命は最も之を避けざる可らず、蓋し革命の止む可らざるは國家の弊政を矯め人民をして天賦の權能を完ふせしめんがためなり、然るに急激なる改革はその弊を矯めんとして一層多くの弊を遺すものなり。天權を振張せんとして一層之を滅殺するものなり、所謂病を治して人を殺すものなり、角を矯めて牛を亡ふの類、大に戒めざる可らずとなし、諄々唱導して倦まず、ローランド氏がギロンド黨に入りたるも、ギロンド黨の政客が相率ゐて氏の袖下に集合せしも、夫人の助力に原因せずんばあらざるなり。(以下次號)

## ヴィクリフト陛下

同人

緒言

明治三十四年一月二十二日大英國女皇ヴィクトリア陛下崩御し給ふ、女皇壽を享け給ふこと八十三歳、世を治しめし給ふこと六十六年、盛徳六合に光被し、仁慈草木に及ぶ英國皇室は勿論、四億萬を以て數ふる英國臣民の悲嘆果して幾何ぞや。

我 皇上、深く哀悼の意を表せられ、宮中喪を行はせ給ふこと三週日、

帝國議會、また一日の休會を決議し、帝國民痛惜の誠意を表す、

吾人異國の民、地をさる數千里、固より人種を異にし、宗教風俗を異にし、言語文章を異にす、而かも陛下の訃音を拜し、悲嘆殆んど禁ずる能はず、偶々

座右を探りて、陛下の略傳を書ける英文の小篇を得、即ち補譯して之を本誌に登載す、敢て女皇の傳を立つといふにあらず唯讀者とともに、同情の涙を分たんとてなり。

## 第一 女皇の幼時

女皇は一千八百十九年四月十九日、ケンシントン城に降誕し給ふ、父なるケント公爵は、先きにゼルマンに住ひけるが、その夫人の妊娠せるを以て、本國なる英國に歸りて分娩せしめんと申し立ちて、急に歸國し給ひ、さてケンシントンにと入城したるなり。

やがて、公爵夫人には、やすくと出産し給ふ父公爵の喜悅斜めならず、其年の秋の暮に、公爵は一家をシドマスに移しぬ、生兒の健康に適當なる地なりとありてなり。

(以下次號)

## 文苑

車のわだち (承前)

撃水生



▲この正月、朝より來合せ居たりける賀客の漸く辭し去りたる二時過ぎ頃、出入りの車屋の親分、年始にて來りぬ。取り散らしたる盃盤を片付けさせながら、吾は更に屠蘇祝は、ん程に今少し、こちらにと招げば彼は近く進み、恭しくぬかつきて、祝詞を述べぬ。

『どうだね、車屋さん、去年は、しつかり儲かつたかね。』

「へへへ、お蔭さまで……併し、どうも實申し上げりや駄目でございましたな。もう、私も御覽の通

り年は取りますし、何かほかに、い、商賣を見つ  
出して商賣換を致したいと思つていますんですが、  
矢張り、考が付きませんので、こうやつて愚圖  
々々致して居ります様次第で、へへへ」

「へへへ、併し、何も年とつたからつて商賣換す  
るにも及ばないじやないか、大勢若い者を使つて居  
れば」

「イヤ旦那駄目です、やつぱり、自分からさきに立  
つて働かせませんでは若い奴らだつて動きやしません  
夫に雨でも降るとか雪でもちらつくど來た晩などは  
どうしたつて自分から草鞋引つ懸けて出なくつちや  
あ、どつても駄目ですねー……そりや勿論餘計に働  
いた奴には餘計にやるのですがね、それでも、いけ  
ませんや。ですからこんな商賣は年とつてからは、  
つまりませんのです、へえ」

「貸し車も、やつてゐるだらう」

「へえ車も貸します……ア、車貸すので思い出しま  
したかね、おかしくもあり可愛想にもあるのは書生  
様なんですな……なぬに大抵夜分ですがね、そいで  
す、毎晩四五人も來ます。貸貸ですか、貸賃は一臺  
で五錢から六錢です、尤夜分ですし、夫に相手は書  
生さんでなれませんか、新しい車など貸ては駄目  
ですから、まあ古いのを貸てやるんですが、……そ  
りやおかしいですよ、宵のうちチャンと羽織を着ま  
してね、書生下駄をはいて私ん所へ、やつて來まし  
て、そこで例の法被と着代へるんですが、中には泥  
除をさかさにつけて内の若い奴らに笑はれたりなん  
かしまして……」

彼は今しも注ぎやりたるコップを取り上げて、グツ  
と一口喉に潤しながら、さらに言葉をつつけて

「この間もおかしかったことは、一人の書生さんが支度をして出かけたんですが、暫すると途中から引返して来ましてね、さーも足が大變に痛んで仰いますから、一體どーしたんですと言って、よくー見ますと、面白いヒやありませんか、草鞋をねー旦那さるで、さかさにおはきなすつてるのですもの、夫から女房の奴が出てはき方を教へてやるやら、致しまして、やつこのことで出て行きましてんでげすがね、……夫でも感心に衝突もしないで、無事に、一時ごろになると皆返つて参りますよ。一晚にどれほど儲けるかと仰るんですか……そーです、さまりませんが大抵多い時で、五六十錢少い時でも、二十錢やそこいらは、取て御返りの様です、尤中には、あんまり遅くなつて明日のお稽古にさし支へるといけぬといふので、十一時ごろにお歸りになる方もあ

りますですがね。……」

過ぎし雪の夜半、夏の宵のことども思ひ起されて得知らぬ感慨に打沈みたる吾は、默然として聞き居たりしに、彼はノベツに

喋り續けて、いさゝか勞れたらんが如く、やをら、銀の煙管を取り出して、悠然と一服ふかしながら。



「ねー旦那私あ、それで、つね々思つて居るんです。まあ世の中には随分贅澤にお金を送つて貰つて、夫れで勉強もなさらないで、學校もお留主にして、せつせと惡所通なぞなさる書生さんたちが、大變にある相

で、新聞などにも折々見えるといふ話なんですが、  
又一方を見ますと、夜は寝ないで、こつやつて私  
所の車なんぞ引いて、お金を儲けてそれで晝になる  
と御休みもなさらないで毎日學校に出て御稽古な  
るといふなんざあ、すばらしい剛氣な書生さんじや  
ありませんか。それで、どうか、こんな書生さん  
のお話を、ねー旦那、あの道樂書生さんたちに、聞か  
してやつたらと思つて居りますのでへえ」

今しも、彼が、親分的俠氣を以て、まさに、満腔の  
氣焰を吐き出さんどせる時、また一玄關に賀客の來  
訪せるありければ

「いや、どーも大變に長座を仕りまして……」  
なる一語を残し匆々にして立ち歸りぬ。  
(完)

## 夜の梅

東くめ  
夜寒の風の  
吹み入りし、  
忘れよと、  
ひまもりて、  
かよふなり、  
かをるまで。

冬のつらさを  
閨の板戸の  
軒の梅が香  
かたしく袖も

## 母を戀ふ

さくら  
「父母より遠く遊ばず」の  
聖のをしゑ打とひき  
出しは去年の夏なりき  
三百里外に母はあり  
去年の葉月の末つかた  
馴れし家をば立ち出で、  
又の旅寢のかりまくら  
孝養の日は終になし

三百里外に母はあり

旅から旅になれどろも

過ぎにし歳は六つ七つ

三百里外に母はあり

我が旅衣縫ふひまも

一とせ過ぎて歸る日を

三百里外に母はあり

學びのわざに日を暮し

母の情を縫ひこめし

三百里外に母はあり

身に置く霜を重ねつゝ

寄る年波に老ひ給ふ

くれくれ云ひし言の葉は

待たんとの外あらざりき

歸りてつゝいる古布子

この手のあとぞ忍ばるゝ

### 新しき學校

小林つね子

一、學びのまごの新しく

今朝あけそむる日のみ影

輝きわたる大君の

み恵仰ぐたよとさよ

二、磨き造しまなび屋に さし入る月のかげ清く

満らひたる師の君の み影につど人嬉しさよ

三、天地静かに治まれる 御代の光をたどりつゝ

文の林にわざを積み 聴がてつくさん國の爲

### 花の木蔭

同人

いでや遊ばひまさらかりの

花の木影にまどゐして

囀る鳥の音聞ながら

思ふ友垣かい連れね

朝霞

中島歌子

のに山にたなひかれても行ものは

霞むわしたのこゝろなりけり

花下友

中島歌子

契らねどひとりふたりの友たちに

あはぬ日もなき花のかけかな

菜の花

田中みの子

きのふかも雪間にみえし山はたの

すゝなの花になりにつけるかな

梅花所々

佐藤つや子

こゝかしこ梅のたよりの聞ゆなり

いつこそにまつゆきてみん

里霞

中村禮子

寐にかへる鳥のこゑのみ聞えつゝ

かすみにくるゝ山もとのさと

同

磯部つや子

夕まくれかすみやふかく立ぬらん

ほのかになりぬさとの燈火

早春山

たけ子

いつはとはわかぬ常磐のみねの松

春たちけらし霞たなひく

鶯

同人

宿しめよなけし鶯若草の

つまやの梅のさたすきぬまに

幼稚園園

同人

うなぬ子かひつひつとひてをしへ草

つみつゝあそぶ庭そゆかしき

幼稚園幼兒

同人

二葉よりをしへのにはにうゝるなり

咲きこそにはへ大和撫子

月夜に和歌浦をおもふ

和歌子

思ひやる和歌のうらわのおもかけを

うつすは月のかゝみなりけり

初 雪 和 歌 子

はかなくもつもる垣根のはつゆきは

朝日さすまそいのちなりける

冬 月 同 人

霜ふかみ寒さ身にしむ池のおもの

あしのかれはに月そきらめく

埋 火 同 人

烏羽玉の夜やふけぬらしすひつなる

おき火もいつか灰かちにして



## 説 林

### 兒童の道德的訓練 (二)

黒田 定治

兒童の道德心の發達の模様大凡上述のごとしとすれ

ば、これが訓練の方法は、素より此の發達の狀態に従はざるを得ず。而して上述せるがごとく、兒童の最初の道德心は、罰を恐れ賞讃を喜ぶ利己心より來り、父母教員等自己を支配する人々の命令禁止は、善惡の標準となるものなれば、賞罰命令は極めて不變ならざるべからざることを明なりとす。もし公明を缺き轉變常なきときは、決して兒童の道德心をして、健全なる發達を遂げしめ將來善良なる品性完全なる道德的習慣を形成せしむることを得ざるなり。

果して然りとせば、兒童の道德訓練の任に當るべき父母又は、教師の發するところの賞罰命令等は、其の性質正當確定にしてよく兒童の心意上に影響感化を及ぼすものたらざるべからず。我等はなほ命令の性質につきて、少しく述ぶるところあらんとす。

各特殊の場合に於て父母又は教師の發する命令は、

如何なる形式を有すべきかは、素より豫じめ説くこと能はず、其の場合によりて稽考せざるべからざるものにて、教育者其の人の伎倆に任せざるを得ず、然れども一般に通じては、命令は常に、次ぎのとき性質を有せざるべからざるものなり。

一、父母又は教師の命令は、道德上の權力を表示するものなり。而して其の眞正なる表示するがためには決して偶然的命令たるべからず。其の自儘勝手の意志の發表にあらずして。よく條理に合し理由を有するものたらざるべからず。

一、父母又は教師の發する命令は、正確不變なるを要す、即ち所謂朝令暮改なるべからず。昨日これを許して今日何等の理由なくしてこれを禁するがとき同一の場合に、同一の命令を下さざるときは、鋭敏なる兒童は直ちに、其の缺點を

發見し、其の弱點に付け入り、言を左右に托して其の命令を遵奉せざるに至るべし。

一、されば教育者は、自己の安逸を貪り、懶惰に耽りて兒童の監督を怠り昨日は、一々命令を下したるも今日は捨て、顧みず、兒童のなすところに放任するがときことあるべからず。

一、教育者は、自己の氣質氣分の爲めに影響を受けて、命令を二三にし、或は其の嚴正の度を増減するがときことあるべからず。教育者が氣分のあしきために其時は平常許せるところをも禁止、嚴正の度を増して、徒らに怒聲を發して叱責するがときことあるべからず。

一、教育者は、素より公平不偏なるを要す。然るに個人的愛憎のために、此の子には此の遊戲を許しながら、彼の子にはこれを禁止、此の子には温

顔これを命ずるも、彼の子には怒聲これを禁ずるがごときことあるべからず。

一、教育者は、只猥りに兒童等にすかれ、其の父兄等に愛せられて人望を得んがために、其命令及び其嚴格の度に變化あるべからず。然らざれば道德的法則の代表たる威嚴を損害するに至るべし。

一、教育者の命令は兒童の生活の各部を纏綿し歩き方、口のきゝ方、手の上げ下げより、さては箸の上げ下げまでかくなせ、しかせよと命令し一舉一動一言一行、悉く命令によりしむるがごときとあるべからず。かく兒童を束縛するときは、遂には、悉くこれを守り能はざるに至るのみならず、兒童は全く受動的のあやつり人形のごとくなりて、善の自發的働作をなすの機會なきに至る。

るべし。兒童の行爲思想の自由は或一定の限界内に在りて、十分に保護し、命令 遵奉と思想行爲の自由と衝突するがごときことあるべからず。これと衝突する命令法則は決して正當なるものにあらす。

一、教育者の發する命令は、簡單明瞭にして誤解せられざるを要す。命令冗長にして、其主意の何れに在るかを知るに困ましめ、或は命令の終りを聞く時分に既に其の始めを忘るゝがごときは決して命令の功なきなり。常にくどくどしき口やかましき人の命令よりも、ことは數少き強き命令は、兒童は謹んでこれを遵奉するものなり兒童には大概の場合命令の理由説明を附するに及ばず、全く教育者の威信に任かすべし。

一、道德上の法則は、決して人のなし能はざること

を望むものにあらず。而して教育者は、其道徳上の法則の代表者なれば、相當の努力を以てするも爲し能はざるがごときを命令すべからず。爲し能はざることを責め無理なることを望むときは、兒童は自然に不柔順となり、しかも其の不柔順は却て正當となるに至るべし。

## 女子の職分 (前號の續き)

### 單 念 士

女子と雖も活動勢力なきものにあらず、女子と雖も或仕事をなし或企てをなして家族社會國家の効益をなし得ざるものではありません。只仕事企業の方面が男子と異なるのみであります、即ち女子の働は重に内事に關し、小事に關するものであります、然れども世の中のことは、外事と大事でばかり立つものではあり

ません、此兩者相俟ちて始めて家族社會國家の改良進歩は企圖せらるゝものであります。然るに世には女子は何事をも爲し得ずとなし、男子とは比べにならずとなし、改良進歩其他各種の計畫をなすは男子にのみ限る様に云ふものあれども、之れは比較の標準を誤りたるものと云はねばなりません。何となれば此等は皆女子は男子のする仕事はなし得ず、よしなすも比較にならずと云ふのみ、是し地を換へば女子も尙同じ詞を云ふことが出来ましょ、故に女子と雖も家族社會國家に對し、相當なる職分を盡し得ると云ふことは勿論であります。

さて世の多數の女子は、婚姻と共に明に重入なる職務を負ふものであります。而して此職務は女子自身に取、又家族社會國家に取りて相當且つ重大なる任務であると云ふことは何人も疑はぬのであります。否

是は人類の發達上より来る必然的の任務であります、而して其任務とは何ぞや、他なし、女子の嫁するや、其聲の如何は以て家族の浮沈和不和の原動力となり、其の手の中には、小供を有爲の人物となし又はなす得ざる所の機を有し、常に家内の中心となり、進んでは其室家の光輝を放つ處の源泉となすものなり。即ち此等の事項は女子の職分中の最高本務と云ふべきものであります。尙之を分類して見ますれば、女子の職分は

一、妻たるの職分

二、母たるの職分

三、家内の調和者たるの職分

の三つであります。尙一步を進めて申せば、此三者は女子の天職でありまして、必然的任務であると云はねばなりません。

然るに、茲に數多の疑問あり。女子は此三大天職を

全ふせんが爲めに、何をなしつゝありますか。之が準備として如何なることを學びつゝありますか。世人は之、就て如何なる指導をなしつゝありますか。近時の女子教育は、其知識を授くる部分より云ふも、訓練の上より云ふも、其天職を全ふするの道と與へつゝありますか、少くとも日本の女子教育は此方針に進みつゝありますか、此三大天職を全ふせんとして、教育を受けたる妻と母とは如何なる仕事をなしつゝありますか如何なる成效を持ち來しつゝありますか、將た又如何なる失敗に陥りつゝありますか、世の女子教育家淑女良妻賢母諸君よ、希くば此等の疑問に答へよ、希くば吝なる勿れ、今日の家庭は昔の家庭より平和でありますか、和樂でありますか、今日の子供は昔の年齢の子供に比すれば賢くありますか、今日の男子は昔の男子に比すれば家事に顧慮する所少くありますか、

若し此等に對して左様であると云ふ答がありますれば、獨り一家の幸なるのみならず、國の幸であります。然れども若し疑はしき點ありとしますれば、女子たるものは、尙一層己を訓練し、己の見識の範圍を廣くし、正しき知識を應用して、己の天職を全ふすることを務めねばなりません。

(未完)



## 研究

臺灣に於ける古談 (承前)

町田 則文

### 第二 其他人物に關する談話。

歴史以外の人物談には、事實あり、假設あり、將た事實と雖も、多少の粧飾を加へたるあり、假設と雖も、

或は事實に因由するあり、一々之を分拆するは、一朝一夕の事にあちぎるのみならず、寧ろ是れ土俗學上の、區域に屬し、教育上に左まで必要を認めざるべし。故に茲には、事實と假設とを問はず、一括して、一項の下に掲ぐることとなせり、但其中につきて、

#### 其一 教訓的事實、

#### 其二 愛笑的事實、

に分かれ居るは明かなれば、此小項の下に、各其事實を配纂することとせり。

#### 教訓的事實。

- 一、劉元碧といふ人、他人の窮苦を救ひ後其子、狀元に中り富榮を致せし話。
- 二、許氏の祖母貞節を守りし話。
- 三、耳太守の敏智能く罪を判せし話。
- 四、聰慧なる幼女の話。
- 五、臺南に一老生あり、病によりて病み、謙によりて癒へし話。
- 六、貪慾なる樵夫、人を救ふの功名を、博せんとして、反て人を殺せ

し話。

七、子を愛する親と、子を虐する親との話。

八、貧食の婦、他人のために、尿を食はしめられし話。

九、金姑といふ女子、山に在り羊を牧し、困苦に遇ふ毎に、外に在る

夫を思ふ話。

十、自身の肘股を割き、父母を養ひし話。

十一、泉州の一富人、米衣を貧人に施し、其子顯達を得し話。

十二、錫口の兄弟五人、父の死後家産を分たんとして、官に賄ひ、自

利を博せんとせし話。

十三、海瑞といへる一縣官、清廉民に溢みし話。

十四、妻あり、夫の寵を恃みて、其正妻を虐し、後殊を受けたる話。

十五、夫は武狀元となり、妻は文狀元となりし話。

中に就ち金姑の話は、二人同伴なり、今之を、倫理

の目的よりして、分類すれば、

(イ)、孝に關する話、 一件

(ロ)、貞に關する話、 二件

(ハ)、仁に關する話、 二件

(ニ)、智に關する話、 三件

(ホ)、清廉に關する話、 一件

(ヘ)、貪慾に關する話、 三件

(ト)、謙と褻とに關する話、 二件、

(チ)、慈と不慈とに關する話、 一件、

とす、而して教訓としての、趣旨より言へば、

勸善的の事實、 十五分の九。

懲戒的の事實、 十五分の六。

なりとす、但一事實中、勸善と懲戒の二事と、兩存せ

る者は、其談話の主格目的によりて、一方に決したり。

愛笑的事實、

一、男子の子を生める話、

二、女子の鬚を生ぜし話、

三、一詩人、東家の女と、情を通ぜし話、

四、人に儲はるる二兄弟、志を言ふへ弟は若し我皇帝たらば、必ず豆

仁糖を食はんと言へば、兄は若し我皇帝たらば、一二百圓の銀を、

汝に貸與するは容易なり、當に豆仁糖のみならんと言へり、話。

五、三人の知見陽物、何物なりやと、品評せし話、

六、宦情人の、後生白鼻猫とならんと思ひし、(鼠は白糖を好む、白鼻

猫は白色なり、故に、暗衣鼠の白糖と誤り認めて、來り食はんと

するとき、之を捕へ食ふべし、乃勞せずして食を得ん、話。

七、泉州の陳三と云ふもの、主家の娘と情を通ぜし話。

八、明の時、一老人あり、猫と鼠と親みしと、語りて人に笑れたる話。

九、方化といふ、近視の人、鶏屎を、田螺と誤りて、食せし話。

十、牛闘を悦び見て、終に蹴倒されたる話。

十一、古樺といふ人の子、三字經を讀むに、「人之初」し、「初之」といふ

如き、戲讀をなせし話。

十二、四人の不具者、相談り、畫師に、完形を描がかしめたる話。

十三、小兒の鳥を逃がせし話。

十四、一狂人、禪を穿ち、醋瓮を擔ひて行きしに、兎を捕へんとして、

瓮を地に置き、禪を脱して、之を逐ひ、爲めに瓮を倒し、禪を

破り、且時を空しく過し、雨に遇ひし話。

十五、或山に、虎姑婆といふ、老醜婆ありしといふ話。

十六、一產二子の、婦ありし話。

十七、人の犬を産みし話。

十八、生蕃の、田を耕せる土人を、殺せし話。

十九、古への人は、身軀大なりしが、漸次に小となりし話。

廿、山西絳州府龍門縣の、薛仁貴といふもの、幼より言ふこと、

能はざりしが、後父母の生日に當り、「福如東海、壽比南山」と言ふを得しとの話。

とす、中に就き、方化の話は、二人同伴とす、而して

右の談話は、固より、教訓以外に、屬すること、勿論な

るが、其談話の成立に、つきて分てば、

(イ)、或事實を寫せし話、 八件、

(ロ)、想像に屬する話、 五件、

(ハ)、諷諭に屬する話、 七件、

なりとす、中に就き、生蕃の田を耕せる土人を、殺せ

しといふ話は、臺灣に古來生蕃と稱する、一種屬あり、

(五年十一ヶ月)

常に支那人

を、殺すを嗜

み、支那人の

之を恐るる、

虎よりも甚き



の致す所にして、是れ實に、支那本土人の、常念以外に  
於て、特發せられし思想を、言ひ表はせる、一の古談な  
ることを知らるるなり。

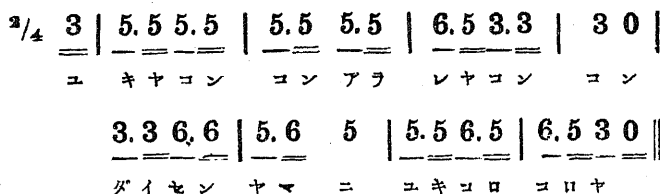
(未完)

## 盛岡地方の手毬歌、御手玉歌

盛岡 山村 材美

## 鳥取の俗謡

鳥取 永井幸次寄



雪やこんく

霰やこんく

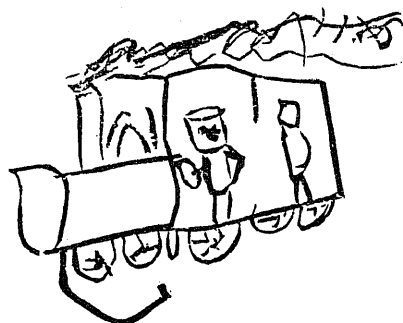
大山やまに

雪ころくや

1. 學校々々の生徒々々の勤めといふは朝は早起き手水をつかひ、父と母とに一禮終り、目上々々に挨拶なして夕さらへし手本や本を、しやんと包んで、名札を添へて姉は妹に兄は弟に心付けつゝ學校に出で、行儀、正しく側見をせずに教師々々の教を守り、忠と孝との二ツの道を理へ知るのは第一よ第一よ

2. おらが姉さん三人御座る一人姉さん唱歌が御上手、一人姉さん裁縫が御上手一人姉さん學校に御出で、學校一番勉強家で御座る五時に起き出で十時に寢ぬて、寢ぬる時まで書物を讀んで、讀んで覺えて、覺えて讀んで、今年始て、試験に出たら其處の校長さんに勉強が知れて本や器械と褒美に貰ひ事の次第を新紙に載せて永く世間に賞められた、賞められた

3. おらが姉さん三人御座る一人姉さん太鼓が御上手、  
 一人姉さん、鼓が御上手、一人姉さん安達者で御座  
 る、五兩で帯買って十兩で紵けて紵目々々に赤紅さし  
 て縫目々々に七總、下げて今年始めて花見に出たら、  
 寺の和尚さんに抱きとめられて、御洒落 話され、  
 帯の切れるは、厭ひはせねど、縁の切れたは結ばれ  
 め結ばれぬ、前で結で後でしめて、しめた所に「い  
 ろは」と書いて、「いろは」小女郎は伊勢伊勢、参る、  
 伊勢の長者の茶の木の下で七ッ小女郎はハッ子を産  
 んで産むに産まれず、下すに下りず、向ふ通るは醫  
 者ではないか、醫者は醫者だが薬箱持たぬ、薬、用  
 なら袂に御座る、此を一服煎じて飲まして見れば、  
 虫も下りるが其子も下りる、若しも其子が男の子な  
 ら寺へ登して學問させて、寺の和尚様、道樂和尚で  
 高い段から突き落されて、たまくら落し、笄落し、



(月ケ一十年五)

お仙々々、お仙女郎其方の挿したる笄は、拾うたか、  
 貰うたか、美しい、拾ひも貰ひも、いたさぬが、御  
 仙の針箱、開けて見た、開けて見たれば、雌鳥、雄  
 鳥シッシシ、ホッホッホ、中よし、およし、此で一貫  
 貸しました

4. 名所々々御國は名  
 所、前は海なら後は  
 お山、後山から鶴は  
 孵ける、何とふける  
 や、一ふき、六ふき、  
 下へ下れば、ふるや  
 は御座る、ふるやお  
 いても、そだて、置いて、合ふか合ふかと執念はや  
 し、なめさかぞっこい、熊のどんさく、肩に掛けた  
 る帷子、たかしんしよの梅の折り枝、中はごぞんの

反り橋、そんな反り橋、渡らぬものか、こきりこきり五左衛門は、何處で打たれた、鹿島街道の茶屋の小娘に打たれた、打たれたも、面目ないで、からすやぐらで、身を捨てた一ちようく

## 倫理管見

石井 國次

### 第四 不完全なる社會

さて次に考ふべき問題は然らば過去幾千年間の社會及現在に於ける社會は果して吾人の諸慾望を満足せしめしや否やといふとである。大哲釋迦は此世を假の世空蟬の世と教へ大聖基督は死後に天國あることを説かれた甚しきに至てはシヨツペンハウエルの如く此社會を苦痛の谷とまで罵れるもあつた之等の例を挙げたならなか／＼數へつくせぬが兎に角多くの人が此社會に満

足すること能はざりしことは争ふべからざる事實である

けれどこれは人間に快樂よりも苦痛の方がより大なる、より永續する印象を興ふる性質のあるためで勿論個人は過去にも現在にも亦恐らく未來永き間にも社會的生存に依て絶對的満足絶對的幸福を得ることは出来ぬけれど孤立的生存を爲すよりも比較的頗大なる満足を得たといふことは疑ない事實である

しかのみならず予は進んで遠き將來に於ては絶對的満足が社會に於て得らるゝに至らんことを斷言せんとするものである、予は社會が未人類に絶對的満足を與ふることを得ないのは其組織が不完全なる爲である若組織が益進歩發達して絶對的に完成するに於ては人類は絶對的に満足を得べきものであると考へる

### 第五 完全なる社會

然らば完全なる社會組織とは何であるかといへば社會が極めて緻密精細なる有機體となることである時代に

應じ人智の發達に従ひて社會といふものにも廣狹精疎のあるは勿論で或は部族が一社會たりし時或は民族が一社會たりし時のあつたことはいふ迄も無いが今日では國家といふものが一の社會をなして居るものであるそして此社會といふものは有機的組織をなして居るのである此事は二千餘年前希臘の大學者プラトンを始唱者とし近世にては獨逸のブルンチュリー、佛國のフーイエ英國のスペンサー等碩學泰斗の皆承認する所である、

けれども有機體にも其發達に於て種々なる階級があつて人間の如き緻密なるものもあればアミーバの様な疎雜なるものもあるので此現在の社會も即有機的社會ではあるけれども悲いかな未原始的有機體といふべきも

のであつて十分に發達せぬ謂はゆる發達の中途にあるものである

然らば完全なる有機體とは如何なるものかといふに之を組成する各細胞の間に分業と統一とが精密に行はれて利害關係極めて鋭敏となり全體の健全は直に各細胞の健全となり各細胞の痛痒は直に全體の痛痒となるといふ様にならねばならぬ下等動物の様に全身を二つに切斷しても各部は別々に生存し一部の苦痛は全體に左程關係が無いといふ様な感覺の鈍き不完全組織ではいかぬそこで社會も亦完全の有機體となるには第一に分業といふことが十分に發達して來ねばならぬそして各員は皆其社會に有用なる材となり社會の利害と個人の利害と全然一致するに至り第二には其各細胞間を連絡し統一する神経系統といふべき道路鐵道電信印刷等が驚くべき發達をなして相互利害の關係を鋭敏にし從て

社會的制裁極めて強くなり、第三には分業の進歩に伴ひて社會の血液ともいふべき物質的供給豊富となるといふ様にならねばならぬ社會の發達こゝに至れば社會に無用の材なく弱肉強食の悲惨なく吾人のあらゆる慾望は満足せられて謂はゆる天國を現出したものである、社會の安寧幸福と個人の安寧幸福とは全然一致し個人は始めて絶對的に満足を得るものである、(但此天國は國家分立の今日に於ては其現出を望むべからず何となればたとひ國家内に於ては如何に精緻なる有機的組織を爲して争鬭なしとも國家間の争鬭は絶へざるべければなり故に予の説は結局世界一家説となるなり他日特に論究するところあるべし)

## 第六 人生の目的と倫理の善惡

そこで自然に快を求め不快を避くるところの人類の窮竟の目的如何といへば此圓滿完全なる天國を現出する

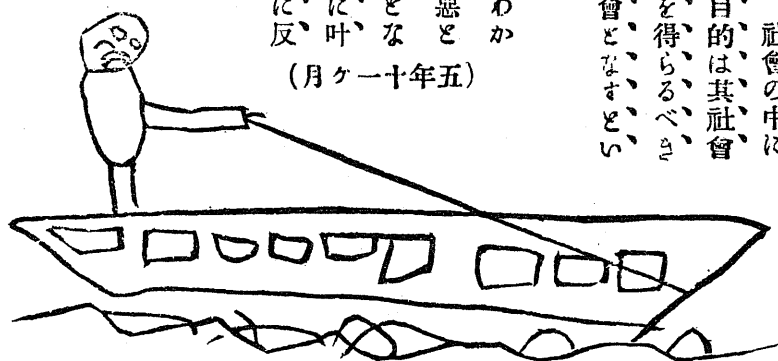
といふことなのである、社會の中にのみ生存すべき人類の目的は其社會を彼等が絶對的に満足を得らるべき緻密精細なる有機的社會となすといふことである

既に人生窮極の目的がわかつた以上は倫理上の善惡といふことも極めて明瞭となつた即社會の發達進歩に叶ふ行爲は善であつて之に反するものは惡である

所がこゝに注意せ

ねばならぬのは成程完全なる有機體とならば全體の安

(月ケ一十年五)



寧幸福と之を組成する細胞との安寧幸福とは全然一致するものであるが完全なる有機體にはなかく、そうはいかぬ時としては全體と其若干細胞との間に一致しがたいことがある、そういう場合には已むを得ず若干細胞を犠牲にして全體の健全を計らねばならぬとく此不完全なる有機的社會に於ても往々にして社會と個人との安寧幸福に衝突があるものであつて此場合には無論個人の方は犠牲に供しても人類窮極の目的たる社會の進歩發達を計らねばならぬ

そこで吾人の先天的に有する諸慾望を自身には高下の別はない感覺上の慾望も精神上の慾望も皆それ／＼十分に發達せしむべきもの満足せしむべきものであるけれども社會といふ標準の上からいふて即社會の安寧幸福社會の進歩發達といふことの範圍に於て諸慾望にそれ／＼の制限をせねばならぬ又諸種の慾望が同時に

起りて相制剋する場合には同情とか公共心とかいふ如き社會的慾望は最高等最大切なるものであつてそれは平生から此高等なる慾望の十分なる養成につきて注意して居らねばならぬ要するに慾望の度に對する制限と位置に對する高下とは人生窮極の目的たる社會の發達進歩といふ標準よりして生ずるものである

## 第七 結論

以上私が申述べましたる大體をくりかへして申し上げますれば人には肉慾もあれば理性もある專自分の爲に計らんとする慾もあれば他人の爲に計らんとする慾もある之等は皆人類に必用なる慾であつて之等を甚しく抑へつけたり又は之等から解脱するなぞいふことは本當の倫理とはいはれぬ眞の道德は之等を益發達させて人生窮極の目的たる社會の進歩發達を計ることである肉慾や自分の爲に計る慾が無くなれば人類の繁殖も望ま

れず社會の進歩も願はれぬからの道德は何でも消極的でなくて積極的でなければならぬ

然らば其社會の發達進歩といふことは何故に吾人の窮極の目的であるといへば社會が分業交通殖産等の驚くべき進歩によりて精巧なる有機的社會となるに於ては社會と個人との利害が一致して生存競争の軋轢も弱肉強食の悲惨もなくなりて謂はゆる吾人に絶對的満足と與ふべき天國となるべき筈であるからである

鵜

(三年十一月)



けれども今の社會今の國家は不完全なる原始的有機體であるによつてそうはいかぬ、のみならず社會と個人との利害の衝突することがあるといふときは

個人は社會の犠牲にならねばならぬ之が社會の進歩の

爲であるから仕方がないそこで人類は未來此天國に達するまでは何事も社會の爲國家の爲といふことを主にして公德を第一の慾望とせねばならぬ (終)

## 圖書教授に付きて

東 基 吉

小學校に學ぶこと前後八年にして卒業し、普通の讀書算術もでき、手紙の往復も可なり出來る者に向つて、何か畫いて見よと云ふ時は、まづ頭を搔いて、とても出來ぬといふ。進んで高等女學校を五年かゝつて卒業せる者に向つていふ時も亦同じ。中學校を卒業せる者に見るも亦然り。否々高等女學校を出で、更に高等の學校に遊べること四五年の人々に問ふも、尙且然らざるなし。

圖書を學ぶこと、前後十七年、他の學科は皆一通の

用をなすを得るに、之のみは遂に何の用も足すこと  
能はず、且其當人も出來ざるを以て、一向當然のこと  
と考へ居るが如し。他の學科例令ば作文習字の如きが  
十七年かゝつて出來ぬと來た時は果して如何。教ふる  
人も學ぶ人も、よも其儘には居られまじ。さればと云  
つて教ふる時間は如何、一週二時間一年八十時間、他  
に比して決して少しどはせざるなり。教授する人、如  
何此邊の消息を解しつゝあるか。

既に此の如きを以て、諸學科の教授法中最進歩  
の遅々たるは事實なり。吾は敢て研究せりとはいはず、  
たゞ一二の思ひ附きたるを記して、斯道の人々の  
教を乞はんとするのみ。

蓋、方法は目的に沿はざるべからず。圖畫の目的は  
一方に於て外界の美を看取して之を手寫するを得ると  
同時に、他方に於ては、自己の有する美的理想を發表

する機能を得しむるに在り。一を客觀の美といは、  
一を主觀の美といはん。二者相須つて、各其歩を進  
むるものなり。この點より見て、吾人はこゝに今日の圖  
畫教授の一二を批評せんか。

(一) 手本を與へて。一生懸命に之を模寫せしむるは、  
實物を見て其形體を模寫する階梯にして、つまりこの  
目的を達する方便なり。たゞに手本を金科玉條とす  
る教授法は誤謬といはざるを得ず。實物を手本とする  
教授は、甚少し。

(二) 形體を正しく、模寫せしむるには、精確なる用機  
畫法に依らざるべからず。現今の教授は、自在畫と連  
結すべき用機畫を全く別種のものとして別離せしめた  
り。

(三) 自家の美的理想を隨意に發表せしむることは、重  
大なる任務に屬す。一方に於て客觀の美を看取せしむ

るは同時に、他方に於て、主觀的美を發表せしむること  
に於て、其目的を達し得るのみならず。眞個の考察  
に依るときは、客觀を模寫せしむるは寧主觀を發表  
せしむる爲の方便なるや知るべからず。吾人は之を或  
畫家に聞けり、幼稚園に於て頗巧なりし兒童が反つて、  
學校に出で、甚しく劣るに至りしは、學校に於て、隨  
意の發表を束縛したるに依るなりと。この方面より見  
る時は、平本と實物を以て攻め附ける外に、更に自由  
に自家の思想を發表せしむるを要す。

(四) 應用せしむることの少きは又今日の缺點といはざ  
るべからず。他學科の教師は自己に畫の思想なきがた  
め、必然に畫に要すべき場所に於てすら、其挿入せざ  
るを看過し、若くは其不正の畫法を正さざるが如きこ  
と之あり。

五) 圖畫教授に於ては、他の學科と同ぐ、幼兒の心

理的發達の順序に従はざるべからず。一般の初歩教授  
の順序は、畫學の論理的順序に依りて松葉梯子の如き  
直線に初まりて後曲線に進めといへども、止しく眞直  
に線を引くとは、ゆがみなりに曲線を引くよりは頗る  
困難にして、自然に任せられたる幼兒の發表は、悉く  
曲線的なるに依りて明なり。物形は凡て直線を基とし  
て、觀察するを得べしといへども、これ寧論理的順序  
にして實際上の練習の尙未積まざる幼兒々童に取り  
ては、曲線は寧直線よりは容易なるものなり。

### 應 問

問(一) 教育思想のり、又女子の訓育をなすの餘暇ある  
母親、之が教育を司るならば、幼稚園教育を受けし  
むる必要なきか。

答 家庭教育と幼稚園教育とは別のことにして、もし

完全なる家庭ありと假定せんか、無論かかる家庭にて養育せらるゝ効果は非常に大なりと雖、家庭にては皆

其一族のみなれば、家庭に於ての一員を作る上より云へば十分なるべし、然りと雖、他日社會に出て、社會の一員たる爲には、猶其準備不足なりと云ふべし、故に之に加ふるに、幼稚園教育を以てし、社交的の基礎を置くの必要あり、之れ完全なる家庭の子女も更に幼稚園教育を受けしめざるべからざる所以なり加之、

家庭にて如何によく運動の便利を備へ、遊ぶためには兄弟ありとも、年長なるは學校に出づべければ、其伴侶至て少きが故に、淋しげにして何となく氣の毒なる心地せらる、幼稚園に入らんか、間食して身體を悪しくすることもなく、交友の愉快は十分なる運動を奨勵し、身體の發育を助くること大なり。

問(二) 上流社會にては、父母に教育思想あり、之が監

督も世話も充分に届くべければ、強て幼稚園の必要なべきか。

答、現今、上流社會の事を聞くに、下等社會の如く、子女を放任するものはならず、皆附添なるものありて、これに其世話を一任するものゝ如し、然れども其附添なるものは、教育思想を有するものは至て少く、又中等社會子女の如く慈愛深き父母の手に人となるにもあらざれば、届くが如く見えて却て實際は然らざるもの多し、従て其性質の矯正を要するものも多きが如し、且前問の如く、完全なる家庭に於てさへも、其必要ある處なれば、假令上流社會なりとて、必要なしとは云ふべからざるなり。

## 女子教育に就きての疑問

高田 中原 ふく

女子に學術技藝を授くるは、良妻賢母を養成せんと  
ての目的なるべし。良妻賢母の素因は學識にあるに  
や、はた、德行にあるにや、識なくば家を治め、事を  
處すること能はざるべし、徳なき人はいかでか子女の  
教養を完うし得べき。學識固より必要なり、されど信  
ず、いかに識博く、學深くとも、徳義の何者たること  
を顧みざる人は人間の價値なきものなりと。世の良妻  
賢母とは價値ある人間の謂なるべし。この價値を有す  
べき婦人を養成すべき女學校其他にして、其基礎たる  
良心の修養にいかなる方法をとるべきか、是れ大に研  
究すべきことならずや。かの宗教學校は信仰といふ  
唯一の手段ありて修養の便を得るものの如し。然れど  
も宗教を離れたる一般女學校にありては、教師は其

學術を授くるのみを以て（勿論生徒の德行に留意して  
矯正すべけれど）任とし、僅かに主任教師の生徒の徳質  
を看破して時々誨諭を加へ良心を反省せしむる一法あ  
るのみ。若し此法にして數年に渡らんか、著しき効  
果をあらはすべしと雖も、主任の永續すること種々の  
事情より許されざることも多し、かつ良主任を得ること  
は極めて難事たり、故に其人なくも良心修養の道は  
終始絶えざる方法なきか。

つら／＼女學校時代の子女の心を察するに、愛すべ  
き天真爛熳ははや其跡を止めて、巧みに人前を飾り顔  
色を窺ひて事をせんする時代なり。此際に當りてよく  
其本性を看破して道義心を吹込むこといと難し、良師  
ありて「彼等に向ひ來れ汝の爲めに其特質を告げん」  
といふも彼等聞くことを欲せず、言はるゝ時は不興の  
色を呈し、内心には意地悪き師よ人をあしざまにいふ

など、不平を鳴らして毫も心の曲みを直すべくも見えず、ぬはいかにぞや。かゝる者は顔の汚れを示されて謝辭萬遍する比類なるべし、是れ之を矯むる策なきか、之を救ふ良法なきか、夫れ或は生徒より神の如く尊信せらるゝ良師の訓誨も効あるべし、校長の倫理談も必要なるべし、されど良主任ありて人たる心得を述べ將來に及ぼすことを告げ、身を以て模範となす教化に若ざるなり。あゝ主任の責輕からず、主任其人果して其任務を全うする人幾人かある。己經驗に乏しく廣く女子教育の内情を知らずと雖も、各地の知友に依りてただしみるに、多くは良心の修養を缺くものゝ如し、實に嘆すべき至ならずや。かつ主任其人は徒らに名利を重んじ生徒の尊信をかんどして汲々たる者ありと聞くに於てをや。そも〱女子教育の第一着眼は妬心を抑制するにあり。然るに無責任なる教師は、己が効を

誇らんがために徒らに競争せしめて其進歩を見んとす、是れ甚しき謬なり。何となれば、彼等は情の極盛時代なり、妬心も亦充てるものゝ如し。此時に當りて、無邪氣の競争を爲さしめ得るや、競争は一種の怨恨となり、妬心を一層熾ならしむるに至る。あゝ競争と奮闘とはよく思はざるべからず、萬般の惡事は妬心より起ると信じて可なり。されば價值ある婦人とならしめんがために、道義心修養の第一として此妬心を抑制するにありと、思ふはいかに。茲に貴紙を汚して其適否と方法に就き高教を仰がんと欲す。



## 女子服裝の改良に付て

大阪 長谷爲五郎

女子服裝の改良は目下の急務なるや言を俟ず然して先輩諸君の考案なるものを見るに意匠の少しく急激に過ぎ我國固有の美を失ふ感なき不能數百年來因習の久しき男子すら窄袖に改良する能はざる今日到底女子に望むべからざるや必せり此に於て余の考案する所を公にして世の服裝改良論者の參考に資せんとす

一從來の日本服仕立にして衿を除き四巾を巾の儘に用ゆる事

普通木綿巾に付ての畧圖

從來携帶品を帶に挿み、たもとに入る、弊を除かんが爲め袴又は衣類の裏等にポケットを付ること

七十二

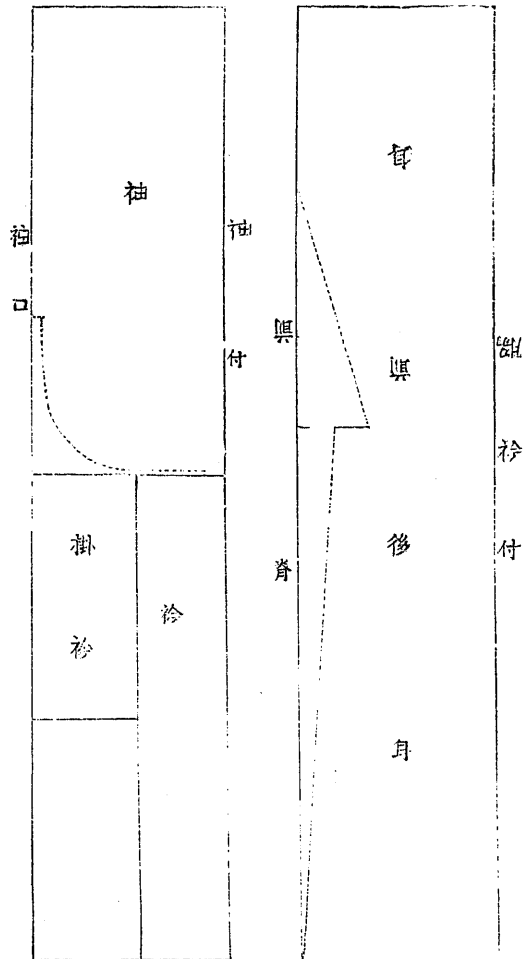
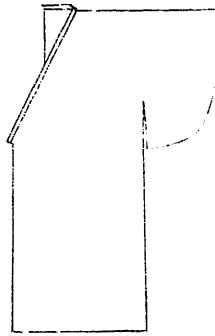
一カラダを除き男子の如く對丈にする事

一袖丈を壹尺貳寸迄に止め應永又は元祿様の大丸形にする事

一人形は男子の如く縫人形にする事

一細帶に着袴する事

右の如くすれば從來の女丸帶一本にて優に裁ち得べく而して容易に行ひ安く固有の美も失はず無論下着を飾るに餘地なければ從て經濟上作業上に至益至便ならん予の如き業に洋服裁縫に従事するものは寧ろ窄袖着袴を喜ぶものなれども今は未だ其時にあらざるを信ず。





## 雜 錄

### 婦人界に及ぼす俳優の勢力

昨年の夏、暇を得て房州の海岸に遊びし時、何團とかいへる壯士俳優の一團來り居て興行し居たりき。由來地方の風俗を壞亂するもの、彼等より甚しきはなし。眞率平穩なる房州の浦邊も亦彼輩の害毒の犯す所となりては、團囂せる一家も忽ち風波の絶ゆる間なく、爲に慈母を失へる孤兒あり、家産を盪盡せし寡婦あり、父母兄弟夫婦離散して一家散亂せしもの數を知らず。吾は此狀況を見聞して、まさに彼等俳優の面に唾せんとしたりき。

もとより其こゝに至る所以のもの、一は田舎女子の教育なきに依るとはいへども、熟々觀すれば、我邦婦

人界に及ぼす俳優の勢力たるや實に驚くべきものあり。嘗て京都に遊びし時新京極の通りに於ける寫眞舖に多人數の夫人令嬢の群集せるを見て、何事ならんかと、行き見れば嗚呼何ぞ圖らん、此夫人令嬢たちは其店頭に曝されたる俳優の寫眞を咏めんが爲に群集したるなりけり。近くは、之を東京に見よ俳優の似顔に附けたる羽子板を喜ぶもの、獨り賣女醜婦に止まらざるなり。否年の市に於ける羽子板に彼等の似顔を附せざる時は、少しの賣行を見ずといふ。尙一步を進めんか、普通の婦人たちの中には兒女弟妹の通學せる學校の名も教師の姓名も知らざるを耻とせず、反つて家橘染五郎の名を知らざるを耻とする人々もありとか。更に又一步を進めんか、美術品として、裝飾品としては、殆んど三文の價值もなき簪に、たい自分等の愛顧せる俳優の紋形を附けたる故を以て五錢十錢の金を投じて争ひ購ふを見よ。若しくは彼等の劇場を退出する際の如き、如何に争ひて其風采に接せんとするか、更に又、

彼等の喪葬に際して如何に慟哭愛惜の意を表する婦人の多きことよ。

古は川原乞食と呼ばれ、今は男なにとか歌はるる彼輩の、此の如く勢力を我婦人界に及ぼせるを見る以上は、所詮我邦婦人界の地位も尙未だ甚高からざるを知るなり。

## 湯屋のさまぐ

●せじ湯 私は、元來性質が狼狽者ですから、この間も狼狽こんで、男湯だと思つて飛込まうとして、さわどい所で氣が附いて見れば女湯だつた。はつと思つて、そこくに引き返して來たのですが、其折不圖目に留つたのは、「せじ湯無用」と麗々しく美濃紙に書いて、真中に張出て居た張紙であつた。其時は別に何の氣も附かないで戻つたのでし



たが借後から考へると分らない。抑々「せじ湯」と云ふ意味が頓と解せない。で、是非なく婦人の方に、一體女湯に「せじ湯」と云ふものがあるのですかと聞いた所が、なる程其人の話で分つた「せじ湯無用」の意味は、つまりかうなのである。

まづ、一人の婦人が、湯に入つてると、そこへ自分の知合の婦人前が、またやつて來る。そうすると、三ツの湯桶に湯をなみなみと酌んで、さーお使ひといつて出す。すると、酌まれた方からも、返禮の意としてまた、四五盃の桶に湯を酌んで出す。また、片々から五六盃酌んで出すといふ様に、十許の桶が互ひにあらちちらと衝突つて居る夫と同時に二個の頭が兩方で、しきりに上下して居るこれが所謂「せじ湯」なので、こうなると、たとひ、使

ひたたくなくつても使はねばならず、いやでも酌んで出さなければならぬが、湯が餘計に入つて困るのは、三助である。そこで、この張紙の必要が起るのだと。

●湯銭のこと 其婦人の話されるには「湯銭だつて、あなた、馬鹿になりませんよ。ま

一、積つて御覽なさいませ二錢五厘が、あたりまへの湯銭でしよう、夫にぬかが五厘流が一錢夫から髪を洗ふと、それが五錢、みんなで八錢もかゝるんですもの」なる程私どもが田舎にありし頃は三厘で湯に入れた、夫から較べると、大したもんだと申さねばならない。

●湯尾での公德 少し尾籠な話ではあるが、この間、湯屋へ行た所が警察からの達だと申す事で、流場に「この處睡はき又は放尿すべからず」と書いた張出がして居つた。この張出が抑々我邦人の缺點を曝露してゐる



ですが、ひそいとやありませんか、そこへ、一人のお客がやつて來まして立ちながら、この張出を見て居つて、やがて、そこへ、うづくまつて放尿して居られた。こゝに至ると我同胞の社會的道徳と申すものは全く、ロと云つて宜しい

## 石井泰二郎氏よ

### りの書翰

前號の本誌雜錄内「禮節作法教授の注意」の項に付き同君より左の書面を寄せられたり。

雜錄禮節作法教授の御注意は、

單に小笠原流などの事にて御説の通りにて候はんが先きに禮法教授については、今回設立の禮法講習會の講師について初めて見ることを得べくと存じ候間、此段御しらせに及候（生きた禮法は四百年前より傳はり居り候事に御座候

「ドレ見てあげよう、くらなわけ、あーと云つてし」  
「あー……」

# 盜賊遊戯

近頃、東京市内の子供等、大勢集りて盜賊の眞似をして遊ぶこと大分流行せる様なり。即、一人が盜賊になり、他の一人が巡查になりて、これを縛つて引き歩き、他の子供等は、大勢で、はやし立てて行くなり。簡様な遊戯は是非とも學校家庭等より禁じられたきものなり。

## 改良衣服について

### 婦人の覺悟

婦人の改良衣服問題、近年甚

盛なり。然れども、其論述する所の人々は多く男子に在り。事は直接に婦人に關せるに、併も其可否改良の異見の我婦人社會の口より出づるもの甚少きは吾人の頗遺憾とする所なり。はた又議論頗多くして實



「子  
あー……」  
「分はれて居  
る醜態銀で  
まいてソリ  
」

行甚少なし、今日或部面の教師生徒間に行はる、着袴の風、頗改良に近しいへども之とても往來のと相距る五十歩百歩のみ、併も尙之をすら敢て用ふると肯んせざる向もあり、なる程或方面より見る時は凡そ新奇のものは目慣れた所より舊來

のものに比して異様に感ぜらるゝに相違なし。維新の際、從來結髪し來りし男子が忽之を斷ち切りて散髪頭となりし風采が、其當時に於て如何に異様に感ぜられしかは、今日より想像するに餘あり、併も、今日の散髪頭を以て、昔風の結髪を見る、まことに間拔けの様に感ぜらるゝにあらずや。改良衣服も亦、斯の如きのみ、其新奇にして目慣れぬ故を以て、不都合と知りつゝも尙舊態に拘泥する様にては衣服の改良到底望むべからず、所詮事は、婦人直接自身の問題なり、他人

の男子に一任するよりは先づ自進んで考究し發表せざるべからず、然して稍意見の確定したるあらんか即奮つて之を凡べての場合に着用する覺悟なかるべからず。見つともないからと云ふことで、いつまでも着用し躊躇する様では、未來永劫改良の機あるべからざるなり。

## 矛盾の性情

虚心平氣、極めて冷靜の眼を以て、極めて沈着の態度を以て所謂國家的感情の如きをも一掃して以て、詳細に我國民に付きて深く觀察する所あらば、誰しも吾人同胞の性情言行に著しき反對と矛盾とを發見せん。

由來我國は、禮儀の國と稱せらる。なる程一個人の間には、殆んど繁文縟禮と言ひたき程、禮式作法につきて面倒を云ふ國民なり。併も一度、出で、公衆社會に接するに及びては、禮儀は問ふ所にあらず、作法は顧みる所にあらざるなり。近來、頗る世人の注意を引

ける公德問題は要するに我同胞の、この矛盾の性情言行を看破せるに過ぎざるなり。

由來、我國民は非常の潔癖性と稱せらる。論するまでもなく、或點に付きては、確に潔癖と稱するを得べし。然れども自ら潔癖と稱する紳士にして蓬々たる鬚髯の何時理髪したるかを知らざる風采を以て人を訪うて敢て不潔とせざる、指先の爪延びて二三分、其間に垢のたまりて灰色となれるをも顧みずして菓子をつまみて平然たる、カラーの暗灰色となり、カフスの眞黒くなれるも平氣にて、フロックコートを上に着用せる等之れ豈潔癖性の國民のなすべき所ならむや。家庭の生活に付きて曰はひか、夜毎の寢具を毎朝日光に曝すことは清潔上より云ふも、衛生上より云ふも極めて必要なることなるに、之を實行せる人果して幾人ぞ學校の寄宿舎等に於ては殊に、はなはだしきものあり食卓の上に、食器を洗へる汚水の手桶を直接に并べて平然たり、これ抑も潔癖と稱する國民の忍ぶ所ならむ

や。野蠻國と呼はるゝ印度土人の家庭の潔癖なるを見

ずや、はた又先進國たる歐洲人の潔癖なるを見ずや。

挙げ来れば此の如きもの只に二三に留まらざるなり。

吾人は之等我邦人の缺點を顧みて大に學校教師殊に

禮式作法教師たる人々の反省を求

めざるを得ず舊法に拘泥し、形式

をのみ責むる時は永劫其甲斐な

るべきなり。

### 思ひ出るまゝ

△吾嘗て、東北に遊びたる時、客

舎の一室に病に伏す、宿の小女來

り告げて曰く

「旦那様、うすのつゝ、ささいりなすが、びやつこ

めすあがりやすかえ」

何とも解し兼ねるまゝ聞き質すこと再三回にして漸く

其意を了し得たり。牛の乳來れり少しく召し上らずや



「子  
「あ……ガ  
「痛たハッ  
「ブッ……」  
「や……  
「こりやたま  
「らんく」

の意なりしなり。

△吾嘗て、清國人某と詰る。時に吾同窓しきりにロー

ンテニスに勝敗を爭ふ。某曰く、

「御國の方は、大變運動熱心です、學問熱心です、

皆宜しい。私の國大に學ばなけ

ればなりませぬ。併し一般に御

國の食物は不甘いです、ですか

ら學生の身體は大變にいけな

い。食物に付いては御國の人た

ちは、私の國に學ばなければな

りませぬ。」

△同じ國の學生、既に我邦に留學

して、二年の後、殆んど吾が國語

につきて了し得たりや否との吾の間に答へて曰く。

「大抵出來ました。併し、日本のてには中々難儀で

す。夫に手紙の語のむづかしいのに弱ります。御伺

ひ致すべき筈に御座候處失禮のみ仕り御海容奉願候

と云ふ様なを覚えるには、中ことに難儀致しました夫に御國の言葉は、大變に長いです。私の國で久闊と言へば、たい二言ですむのですが御國の語にしますと、「いやどうも長々御無沙汰致しました」と云ふ様ですから、中々大變に骨折れます。」

△序に、もう一つ支那人のことを記さんか。嘗て共に大に文學を論じて我國の漢詩に及ぶ。彼曰く。

「御國の詩は駄目です。私の國の詩を凡で講釋して歌てるのです、平仄も韻も私の國では樂器に合ひます、御國の様では、これは一つも用がありません。」  
吾は此議論には一言もなかりき。



## 彙報

○東京府第一高等女學校。目下非常の狹隘を感じつつある同校は、愈本年四月より麻布邊に新築し來年四

月頃までに完成せしむべく、完成の上は生徒數を六百人までに増員し、十五學級に編成すべき見込なりと。因に記す、同校本年の卒業生は五十八名にして新に入學せしむべき生徒は凡四十八名、來四月五六日頃入學試験舉行の筈なりといふ。

○東京府教育會附屬幼稚園保姆傳習所。同傳習所は愈去る二月より開始することとなり、同月四日を以て開業式を舉行せり。幹事長岡五郎氏開會の辭を述べられ、會長岡部子爵は左の意味の演說せられたり。

本會附屬幼稚園保姆傳習所を開設すること今回を以て都合三回とす。思ふに社會が保姆を要求すること近來頗る急に迫りて次第に保姆の不足を感じるに至りぬ。單に幼稚園の保姆のみならず、家庭に於ける善良の保姆の供給亦今日の急務となり、現に予の如きも、之を求むること、既に六ヶ月の久しきに渡りて尙未だ之を得る能はず。當所は、固より幼稚園の保姆を養成するを目的とすといへども、亦家庭に在

りて母に代りて、人の子を育する保母となり得べき者は、實に亦本會に待たざるべからず。人の子を健全優良に育成するは即將來優良の國民を育成する所以、諸子の任務亦大なりと云ふべし。

次で中村同所長の適切なる演説ありて夫れく懇篤なる注意を與へられて式を終えたりとなり。因に記す目下同所生徒は略卅五六名にして授業は一週十六時毎日午後四時より開始しつゝありといふ。

○東京市養育院入院者浮浪の近因。 昨年七月以來九月に至るまで、同院に收容せられし浮浪の兒童三十七人につきて、彼等の自白する所に依り、其浮浪の源因を調査せしに。

父母の死後貧困にして、乞食となれるもの。(三人)

實父叔父等の叱責を受け、或は主人に叱責せられて逃亡せしもの。(四人)

何の思慮もなく我儘に家出せしもの。(一人)

實父母又は繼母に棄てられたる者。(二人)

實父母、繼父母若くは雇主等の苛酷に耐え得ずして家出せしもの。(八人)

實父又は雇主の命に従はず。追ひ出されし者。(二人)

職業柄、自然に悪化せし者。(二人)

父母死亡し、叔父を尋ねんが爲に、浮浪せし者。

(一人)

祭禮に行かんとして、父の許さざりしより家出せし者。(二人)

遊びたきまゝ、家出して歸らざる者。(一人)

不詳。(二人)

(東京市教育時報)

## 海外彙報

英國幼稚園の狀況

安井 てつ

私は子供が大好きで御座りますけれども、保母に

は不適當で御座りますから、幼稚園で實際保育に従事致しました事は餘り御座りません。夫故此度英國に留學中にも諸處の幼稚園幼稚科等は參觀致しましたけれども、保姆の方の氣が付かれそんな恩物の取扱ひ方や唱歌の教へ方等の詳しい處に付ての見落しは多からうと存じます。

倭英國では幼兒を保育する場所を二つに分けます。即ち

一は幼稚科 The Infant Department 及幼稚學校

The Infant School や

一は幼稚園 The Kindergarten で御座ります。

第一幼稚科及幼稚學校は小學校と連絡がついて居りますので、幼稚科は幼兒の數の少ない時に小學校の分科として設けらるゝので、小學校女子部の長(女子)が其科の長を兼ねる場合もあり、又別に長のある場合もありです。又幼兒の數の多い場合には、幼稚學校として獨

立する事も御座りますが、矢張小學校に附屬して居る場合が多く、併校長は別に設けられて居ります。

第二幼稚園は多く中等教育を施す學校(The Second Day School)に附屬して居る幼兒を保育する場處で御座ります。かく申せばなせ幼稚園が中等教育を施す學校に附屬して居るであらうかと云ふ御疑が御座りませうが、今小學校と中等學校との性質を少し御話申上げれば御分りになります。

(英國で初等學校或は小學校と云ふのは、主として貧民の子弟を教育する學校で、是等の學校にある生徒は夫より進んで中等以上の教育を受ける者は比較的少少數で、概して云へば店に行くとか、職を覺えるとか、其他の勞働に従事するとかして、學校を終らぬ中に、又は終ると直ぐに糊口の通を求むる者が多い

のです。かゝる學校は幼稚園學校同様政府から相當に補助を致します。

又一方に於て勞働社會に屬せぬ子供は何處に行かど申すに High School 即中等教育を施す所の學校に參ります。此學校は小學校と高等女學校とを一所にした様なものです。故に小學校とは教育の目的が違ひ、生徒の種類も亦違ひます。

これに依りて、下等社會の子供は小學校に行く前に幼稚園學校に入り、中等以上の社會に屬する子供は、高等女學校に行く前に幼稚園に行くのは不思議では御座りますまい。

### 幼稚園及幼稚科幼兒の年齢

は大抵三歳以上六歳位まで、其心身發達の有様に依りては、六歳以上でも尙留めて置く事があり、且高等女學校の小學部及小學校に移す前に豫備科の様なものが大抵設けてあります。

### 保育課目

は讀方、數方、書方、種々の恩物、遊戲、唱歌、など我邦幼稚園で課する科目の外、容易な讀書算が加はつて居ます。勿論唯讀書算と申す時は非常に六づかしすぎる様にも思はれますが、書方などは書方と同様の意味で、遊び半分にやつて居り數へ方も亦恩物を取扱ふ上に就いてやつて居るのであります。我邦のに比べますと智育に偏して居る様に見えます。

幼稚園學校及幼稚科は、大抵の小學校に附屬して居る様ですが、高等女學校には幼稚園の屬して居らぬものも多くあります。

一體英國の中等教育の有様は非常に複雑して居るもので御座りまして、ウェールズには中學校とも稱すべきものが諸處にあり、其管轄者も一ですが、英蘭は種々です。尤英蘭に於ける高等女學校を支へて居る團體の主なるものが二つありまして、一は The Girls

Public day School Company といふ The Church School Company といふ。そして甲は現今では三十四校、管轄しこれに廿九の幼稚園が附屬して居り、乙は廿九校を管轄しこれに十七の幼稚園が附屬して居す。何故英國では幼稚園がさほど重きを置かれて居らぬかと云ふ譯に付いては、英國の幼稚園界に能く其名を知られて居るチエルタナムの女學校の保母養成科の長をして居るウエルドン女史の批評を借りて申しませう。

「吾英國ではまだ大く幼稚園の必要を認めぬが、其れには二つの理由がある。其一は幼稚園の保母が餘り年が若い事、又一は保母の多くが本當の保育の精神を知らぬによる。即ち子供の心力は如何様に發達するか、又遊戲とか、恩物とかを唯外側から見れば教育上の何の価値もない様になるが、それには深い意味がある」と云ふ事を了解せぬ保母も少なくない。故に思慮ある教育家から見れば、幼稚園では何も確と

した目的なしに唯仕事をして居るかの様に見える。

或保母は恩物を扱ふに慣れて居り、或は面白く遊ばせる事が出来れば満足して居る。中には又本當に保母たるべき訓練を受けた人でも學校を出た後には保育の實地練習をのみ重きを置いて、子供が愉快に仕事をして行けば、保母たるものの本分を盡したと思つて居る人があるけれども、之は保育の本當の精神でない。かゝる人は一家族に於て子供のお守りをする人、則ち子供の傳となり、又は幼稚園の保母としても人の下に立ちて、仕事を助ける様な位置ならば相當して居ませうが幼稚園を支配して、幼児の保育法に付いて研究でもしやうとか、又改良でもしやうとかいふには不十分である」と

(未完)

○米歐に於ける兒童研究 シカゴ幼稚園俱樂部に於ては、大體左の二方法に依りて、兒童研究をなし居れり。(一)參考書を読むこと。(二)各自の記憶經驗より得る所の事實の蒐集。而して昨年より本年にかけての研究題目は、「兒童の本能中に顯はれる遊戲の事實」に

して尙各月に配當せる問題は次の如し。

十一月 鬭爭財産商業的本能に顯はれたる遊戲の事實  
(一)敵手的遊戲・鬭爭的遊戲、眞の鬭爭等が直接に兒童教育上に及ぼす價值。人類歴史に於ける鬭爭の位置  
(二)兒童の物品蒐集の價值。人類歴史に於ける財産的  
感覺發達の位置。(三)商業的本能發達の價值。其人文  
との關係。

十二月 宗教及靈魂主義 (一)靈魂主義が兒童に有する位置。(二)其宗教との關係。社會進化に於ける宗教の意義。

一月 家族 (一)原始的家族生活が近世社會の共同及分業の源をなす所以。(二)兒童が人形其他相互との遊戲に於て、此本能を顯はす方法。

二月 社會 (一)原始の社會的遊戲にして、現今尙存在するものは何か。(二)人生各時期を通じて行はるる社會的遊戲の發達の線路を説明せよ。(三)兒童の精神的道德的發達に於ける社會的遊戲の價值。

審美學飾裝舞踏音樂唱歌。(一)審美學が教育上に占むる位置(二)幼兒に對して音樂、運動、美術、文學等を課するには如何にして之を定むるか。(三)凡べての審

美的發表の形式は教育上同一の價值を有するか。若し然らずとせば、其區別如何。(牧羊生)

## 新刊紹介

●女子書翰文 全二冊 岡田起作君編并書

女子書翰文範五十有餘を擇みて揮毫せられたるもの、作文を學ぶ傍、習字の稽古をなすに適當せるものなり。字形に至極、穩にして且つ文章も宜く。机上の友として進むるに躊躇せず。(寶樹所金昌堂)

○子守歌と手毬歌 第一集 小島芦穂編

在來の子守歌及手毬歌等の、如何に子供等の幼稚なる心意に影響を興ふるかを思は、今日それが改良に最急務なることは誰しも認むる所なれども去りとて、未だ之に着手せる人少きは、陰に遺憾とせし所なり。本書は在來のものより其善良なるを擇び野卑なるを改め、或は新に作りて、一々樂體を附したるものなり。未精讀せざりしも、宛に角今日の急務に應じたるものといはざるを得ず。(發賣所大阪市上小唐崎町第八番屋敷島林南強堂)

○子守教育法 信濃教育會編纂

子守教育の必要漸く認められ所々に實施を見るに至れる今日、此の如き書の出でたるは、吾人の深く喜ぶ所なり。本書の内容は、

第一編序論 第二編概論 第一章子守教育施設の方法及び教科程度

第二章組織 第三章設備 第四章子守取扱法 第二編教材論：讀書：修身：作文：育兒

所載可憐製本優美、刻下必要の良書なり。(定價三拾錢 發行所金港堂)

### 國民心理學 國民教育學會編

一個人を教育するには、其個人の心情の研究の必要なるが如く、國民を教育するには、又其國民の心情を研究するを要す。最近教育學の風潮は個人主義より漸く社會的、國民的主義に移り來りしに、其基礎を作る所の國民の心情を記載せる書籍の未だ我國に顯はるゝことなかりしは、何人も等しく遺憾とせし所なりき。本書は現今有名なる佛國心理學の大家ルボン氏の著書に依りて叙述せるもの、吾人は此種の著書の嚆矢として歡迎し、斯道研究者に勸むるものなり。(定價五拾錢(發行所金港堂))

### 新家政學 全二冊 下田歌子君著

女子師範學校高等女學校教科書として編述せられたるもの、上巻には總論より起りて家内衛生家事經濟飲食衣服住居等に及び下巻は主として育兒教育養老看護交際避難婢僕使役等を記せり、著者は永く華族女學校に於て自教授せられ且つ育兒等に付きては實際經驗せられたる者を掲載せられたりと云へば一家に主婦たらん人々には必讀の書籍なるべし(定價上四十五錢下五拾錢 發行所金港堂)

### 兒童教授論 全二冊 津田元德君著

細詳に後日に譲るべきこととして先づ本書は著者が某地に於ける講習會に於て講述せられたるものを訂正して出せるものなり。著者は方今の教授が兒童に適切ならず、敏捷ならず、効果の擧らざるを以て一汎の通弊として之等を匡正せんが爲め方今の教授に對し批評的の眼光を

以て著述せられたるもの、前篇に於ては汎論を述べ後篇に於ては各論に渡れり。多少教授學に付きて學びたらん人々は好良の參考書たるべし。

### とん な 第一號 大日本女學會發行

女子教育進歩の兆として見るべきは實に本年に於ての女學雜誌の増刊なり「何文館の女學世界、本會の婦人と子どもが本年に至りて新に生れ出でたるに際し更に女學會より本誌を出だせり各論論說、學藝、修身、齊家世務、譚草、詞藻、雜誌、時事、彙報等に別ち、さすかに當世のお顔摘を以て充補せり紙質製本とも優美、吾人は切に健全の生長を祈る。(毎月一回、定價十五錢)

### 評界 第一期第一號 四海堂發行

本年一月を以て出でたる文學雜誌にして、和歌、歌仙、獨詩、漢詩、漢文俳句、英詩、謠曲國文、俗語、戲曲等を評釋し、他に時文、小論、懸賞文等あり。文學を修むる人々には缺くべからざる伴侶なるべし。只だ少しく吾人の希望を云はば、評釋類は後に各一冊に綴り合はして保存すべき體裁に出来たれば、今少し紙質を良くしては如何と思へど、之とても定價一廉なれば致し方なかるべきか。とに角有餘有餘の雜誌なり。(月一回定價八錢)

### 交通世界 第一號 交通世界社發行

又本年に至りて新に出たるもの、由來旅行ざらひなる我邦人には至極必要の讀料たるべし。卷直には風景の寫真、葉裁する所論說には交通機關、旅行、孤獨と交通、時言に道路と文明其他訪問、雜誌、文藝、紀行、小説、案内、彙報等頗賑なり(月一回 定價十錢)



## 野口氏送別會

會員野口ゆか子氏米國に留學に付二月二日第二十號會の後送別會を開く在出席者は京都官廳院長島居嘉三郎君外會員四十七名なりき

まづ初に中村主幹開會の辭を述べ次にフレイベル會員一同よりの送辭朗讀あり會員羽田晴子氏より野口氏に短歌二首を贈らるゝあり次に野口氏の答辭あり終て會員小西信八氏及來賓島居嘉三郎君の談話の後茶菓を供し椅子取り輪拾ひなどの遊をなし終に野口氏送別の歌をうたひ午後五時二十分散會せり

### 野口ゆか子の君を送る辭

ことしけふ二月二日、望を以て野口ゆか子の君を送る。そも君は我幼稚園事業の爲に、盡力したまふと、こゝに十一年、こたびはまれある命をうけて、遠く海外に留學したまはんとす。君の光榮は申すもさらなり。幼稚園事業の爲、本會の爲、會員一同のよろこびは、いかで深からざらんや、今や。幼稚園問題ば、やうやく世人の注目する所となり、年を逐ふて、發達進歩の域に進まんとす。此時に當りて、君の此行を見るうれしともうれしく、たのしきものなり。あはれ、三年の後、君が業を卒へて、めでたく歸朝し給ひたらん時は、我幼稚園の、君に待つこと、實に切なるものあらん。幼稚園の前途、本會の前途、君の前途、またたのもしからずや。

このかぎりなきふるこびとのぞみは、吾等をして、こゝにいさゝか送別のまことめを開かしめぬ。希くは君も、山川遠くへだより、風土異なるかの地に至りたまひつらん後は、いかで、御身健に國家の爲つくしたまへ。

幼児の爲につとめたまへ。

明治三十四年二月二日

フレイベル會員一同  
野口ゆか子の君の米國に留學せられたるを祝ひて

羽田 昭子

思ふとち心のかきり祝ひてん

世に榮えある君が門出を  
やすらげく歸ります日を指たりて

樂しく待たんつかしの友

## 入 會

東京の部

養徳幼稚園

女子高等師範學校

同

東京府女子師範學校

同

東京府師範學校

地方の部

熊本縣五福幼稚園

奈良縣高等女學校

同

八十八

池田千東  
岡田起作  
森川清  
野尻てつ  
前田捨松  
藤江富佐子  
小出雷吉  
大平みち  
大塚さだ  
大桑いよ  
緒方さく

奈良縣高等女學校

同

同

同

同

同

同

同

和歌山市始成尋常小學校附屬幼稚園

同

和歌山市女子高等小學校附屬幼稚園

同

同

大阪市東區汎愛幼稚園

新潟縣高田町高等女學校

和歌山市高等女學校

同

廣島市高等女學校

山形縣米澤高等女學校

神戸市神戸幼稚園

寄附金

一金三圓

右一月二十六日幼兒發育研究組會講師宮本仲先生より  
雜誌部に寄附せられたり

龜岡	土屋	草間	山口	山田	安達	淺田	師岡	若尾	川村	中山	宮本	中井	中野	武藤	山本	松岡	福地	榎本	瀬野
つぎ	ふで	貞	孝	つ	や	し	仲	久	澄	す	ま	馬	記	め	し	み	ち	れ	代





# 子守歌と手鞠歌

第壹集

定價八錢

郵稅貳錢

子守歌と手鞠歌の幼童薫化の上に大なる影響あるにも拘はらず歌詞歌曲のよしあしを知らずして昔ながらのきゝぐるしくいやしくみだりなるものがそのまゝに謠われてあるは抑教育の缺點で決して捨置かれぬことである今其急に應じて本書が印行されたのである世の母君姉君達可憐可愛の子女の爲め願くは一本を需め給まへ

滋賀縣大津市

發賣所

島林南強堂  
金昌堂

# 櫻織農商務省意匠六八九號特許品

## 女學校生徒用御袴

社會の日新月歩に伴ひ衛生上及び經濟上より女子服裝改良の説盛んに起りこれが第一着手として今や都鄙到處女學生徒着袴の氣運に向ひたるは頗る喜ぶ可きとなり然るに之に適當する袴地に乏しく爲めに或は不經濟に陥り或は優美の特性を損じ社會をして此改良に躊躇せしむる傾あるは頗る遺憾の至りなり弊店此點に苦心し某美術大家の意匠に基き多年の經驗に徴し華美贅澤に流れざるやう考案を凝し染織の確實を以て機業界に信用ある愛知物産組に依し百手の瓦斯糸にて海老皮色に櫻模様を織出したるものなれば其優美高尚なるは勿論染色は數十回の試験を経しとて赫日に晒すも雨霽に濡るゝも毫も變色することこれなく且つ價格極めて低廉なれば平素實用上尤も適當なるにより大に社會の喝采を博し已に師範學校女子部高等女學校高等尋常小學校女子部幼稚園等より陸續御注文の榮を給はり加ふるに今般農商務省より意匠登錄特許相成りしを以て更に一層織元を擴張し精良なる原料を撰び御高需に應じ申すべく候條多少に拘らず御注文被下度定價表相添及廣告候敬白

### 櫻織仕立上

金貳圓七拾貳錢

- 一 布地見本御入用の御方は郵券貳錢を送られたし
- 一 御注文は御通學の學校名並着物の着丈御年齡等御通知被下候は、好都合に候
- 一 小郵便税は一具二百目の割合を以て袴代金と共に前金御郵送を請ふ着金
- 一 次第直に郵送す尤も代金引換小郵便に托し、別に引換料として金拾錢を要す
- 一 爲替振込局は名古屋郵便信局受取人は弊店宛のこと
- 一 特約販賣御望の方は郵券三錢封入御照會あれば規約書御送り申すべきこと

女學生袴地發賣所

名古屋市玉屋町  
電話特三二八番

永東吳服店

東京市特約販賣店

東京日本橋區  
蠣殼町四番地 永樂屋

大海鍵次郎

國民教育學會編輯

# 日本之小學教師

第參卷第二十七號

三月十五日發行

一冊金拾錢 郵税金一錢

本誌は大日本帝國小學教師の一大共同機關なり初等教育界の一大燈明臺なり苟も職に小學校に在るもの其男たると女たるとを問はず必ず坐右に備へざるべからざる好雜誌なり本誌生れて僅に三歳發行部數實に一萬以上に出づこれ本誌が眞によく小學教師の先導者となり保護者となりて其任務を盡したるによると雖ども抑も又我全國十萬有餘の小學教師諸君の熱心なる反影にあらずして何ぞや

本號には論説として二十世紀の小學教員、完全なる小學校長、吾人の三大敵なる三大雄篇を始め遠藤文學士、隈本福岡中學校長、小池民次、小川松岡、野口授太郎五先生の講述あり、故福澤翁、伊藤博士、及里村勝太郎、林君一、廣瀬爲四郎、山高幾之丞四君の肖像傳記、高等師範學校附屬小學校國語科實施方法、新潟、岐阜、群馬、福岡、四師範學校附屬小學の實地授業及數篇、其他叢談あり人物月旦あり會友論叢あり、通信確實且つ有益なる内外彙報あり、材料頗る豊富にして編輯極めて精なるは世既に定論あり、敢て自畫自賛せず講ふ閱讀して以て之を判せられんことを

發賣所

東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地

金昌堂

關根正直先生校閱

杉山文悟君共編  
杉山俊之助君

増訂二版

# 國史通釋

全一冊 定價金四拾錢 郵税金四錢

本書は日本歴史を修むる者殊に之が檢定試驗受験及斯道の獨習者の便に供せんが爲めに編纂したるものにして各項に取めし事柄は左の如し

(一) 人名(又ハ) 古來歴史上に顯はるゝ人名(又ハ神名)を列舉し正確の讀書を示し其事跡を概説す

(二) 地名 古戰場及城郭を舉げ其所在地を示し且歴史上如何なる事のありしかを記す其他歴史上に關係ある地名

(三) 政治法律 官職、位階、俸祿、貨幣、其他諸制度法令等を舉ぐ

(四) 風俗 家屋、飲食衣服及冠婚葬祭に關する事項其他種々の遊戲

(五) 學問 古來著名の書籍の解題、漢學、私學及現時の諸學校の起原沿革

(六) 美術工藝 繪畫、彫刻に關する事項、織物、染物、樂器其他廣く美術工藝に關する事項

(七) 宗教 神社、佛閣、宗教の諸宗派、宗教上の祭禮等

(八) 雜 前七項の何れとも定め難きもの及其何れにも屬せざるものを舉ぐ

以て本書が如何に必要有益の書なるかを知らるべし乞ふ一本を備へて其の眞價を試みられよ

發兌

金昌堂

杉山辰之助

(電話本局九百五十八番)

東京市日本橋區本石町三丁目

東京侍講本居豐顯先生題詠  
國學院講師逸見伸三郎先生校閱

國語研究組合編纂

# 簡日本小文典

全一冊 定價金參拾六錢(郵稅共)

本書極メテ教育的ニ(文法及假字讀等ハ初歩ヲ記述シ)其例題及練習題ハ總テ小中學讀本、又ハ修身、地理、歴史、理科等ヨリ採擇シテ初學ノ了解ニ便ニシ、尙新定字音假名遣(チモ添ヘタレバ)●尋常小學校

教員講習用及檢定受験用●中學校、高等女學校生徒用●高等小學校國語教授用ニ適切ナルハ勿論、師範學校入學者ノ自修用トシテ亦極メテ適切ナリ。

東京市本郷區森川町一番地

發行所 帝國通信講習會

大賣捌所 金昌堂

矢澤米三郎君校 帝國通信講習會編

# 理科動物圖

第一綴 縦二尺六寸 幅二尺  
本圖ハ犬猫牛馬鶏禁止鳥鴨鵝蛙蛇鯉鯛ノ類十葉ニテ  
定價 金壹圓五拾錢  
說明書 金拾錢

# 理科植物圖

第一綴 縦二尺六寸 幅二尺  
本圖ハ梅櫻薔薇蒲公英麥豌豆松百合胡瓜栗等ノ十葉ニテ  
定價 金壹圓五拾錢  
說明書 金拾錢

矢澤米三郎先生撰 植物圖第二綴出來 本圖ハ羊齒菌蕈藻類バクテリア地下莖外長莖及び内長莖發芽果實及び種子植物の生作用の拾葉定價金壹圓五拾錢說明書二冊金十錢

師範教育學會編

明治三十三年 師範學校 中學學校 高等學校

# 教員檢定試驗問題解答

全 壹 冊  
定價金六拾八錢  
郵 稅 金 六 錢

〔附〕檢定試驗に關する諸規定及取扱手續明治三十二年試驗問題

本書は受験者の研究に便益を與へ可成多くの及第者を出し以て師範教育の施設を補助せんが爲め師範教育學會自ら起稿の任に當り斯學専門の各大家親しく校閱の勞を執られたるものなれば其解明の正確なるは勿論答案として亦能く其肯綮を得たり故に本書は實に受験者のみならず一般斯學研究者に取りても實に懇切なる良師たるべきを信ず斯學に志あるの士速に一本を購ひ本書が坊間普通の此種の書と其趣を異にする所あるを知られよ

發行所

東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地

金 昌 堂

よをを記附御旨るた見を供子と人婦は方御の文注御り依に告廣此

同 同 全國發賣元

# 大改良<sup>使用盡くまで</sup>腐敗固結<sup>等憂なき</sup>受合

田口精爾發明製造

すらずにつけて墨色極めてよろし



特許 開明 墨

並 金四錢と金六錢  
上 金拾錢と金拾五錢  
同 朱墨並金四錢上金拾錢  
容 器付參錢増大小上下御好次第



特許 硯 函 付

第一號金八錢第二號金拾參錢第三號金卅錢  
價中用。朱。朱肉入付長型角型各金二十五錢

大東 唐大 本東 開明 墨の儀爾來高等師範學校尋常師範學校附屬當市諸大公立小學校教育諸大家  
傳京 物販 石町 三市 日 御批評を承り數回の大改良を施し今や全く實地上の最好結果を得特に其硯硬  
馬市 町日 四本 又光澤の麗麗なる一日驚かざるものなし  
二本 丁橋 目區 目區



特許 開明 摺墨

定 價 { 並金參錢と六錢  
上金五錢と九錢

今般習慣上の爲めスリテ便利なる墨を製造せり此墨は從來の硯なれば勿論木。

ブリキ。ガラス。陶器製の硯面或は木板塗板上にても三四回すれば直に濃厚と

同 校算 教諸 なり。子バリ。ニツミ等少なく其上床上。石上等に抛ちて決して碎くる事なき  
用盤 育學 故小學校等に特に妙用なり  
品學 校 品教 科用 發用 寶書



開明 インキ

定 價 { 小瓶入金參錢と金四錢  
壹升金卅錢と金五拾錢

開明インキは光澤麗麗なる眞黒色にしてペン先のさびる憂なく走り方極めて輕  
快なり特に毛筆に使用して書畫共に上等和墨に更に異なる事なき點に於て一層  
高評を得たり誠に希ふ其東洋墨と西洋インキとの兩用を兼ねたる佳良愉快の妙用  
な御試み玉は人事な



墨板用開明墨

定 價 { 大型墨板三面實用分  
函入金拾錢墨のみ金  
八錢其他大小種々

日光爐火等にて暖めて用ふるときは如何に多量にても忽ちに使用出來其美麗に  
して愉快なる色を呈すること來墨の比に非らず



教場 開明 水差

定 價 金廿五錢以上種々

此器は片手に其取手を持ちたる儘拇指の作用にて一滴二滴隨意に水の出し止め  
をなし得られ且つ衛生上水の腐敗を防ぎ轉賣の際水の溢るゝ事なし實に小學校  
教場に一二個を用ひて唯一の品なり

金 金

利見合名會社本店 利見合名會社支店

(婦人の子とも第一卷第三號)

明治三十四年三月五日發行(每月一回發行)

可許省務內日六月二年四十三治明  
可認物便郵種三第日八十二月一年四十三治明

# 教育童話

世の教員  
父兄諸君  
幸に愛兒

本書は小學校賞與品及び家庭の讀本に最も適當せり

教育官丞相

話の正附

丑の三十四年  
一月發賣  
定價金八錢  
郵税金貳錢

東は奥州の果より西は筑紫の極みに至るまで、一縣一郡の間天神の社なきはなし、天満天神とは何ぞ、即ち菅丞相道真公これなり、道真公は延喜の朝に仕へて治績休明、勳功顯赫たりしことは人の略ぼ知る所なり、此の如きに至る所像を掲げて、千々餘年の後ちに至るまで、教師學童の爲めに尊敬せられ、その以のものは、必ず其然る所あればなり、是を以て近來菅公を研究するもの漸く多く、日に月に見るに、其書を見るに至れば、誠に喜ぶべき事共なり、然れども其書たるや大方君子の覽に供するもの、みにして兒童の爲めにするもの少なし、多稼散人つねに之を懷にし、こゝに筆を執て菅公の傳を起し、文章極めて平易に、兒童走卒をして一讀し解し易からしめ、且つ書工をして毎頁圖書を挿ましめ、一讀の下、菅公の人と爲りを想起して、自から感奮興起の心を發せしむることは、是より益々多からん、公の際菅公の何人なるやを人に問はれて知らずといはば、耻孰れかこれより大なるものあらん、速かに一本を座右に備へて公の人と爲りを知れ、

附録には「牛の話」あり、短篇のお伽話にして、無邪氣なる所兒童の讀むに任せて亦一興。

# 教育 童話

第一編 第二編 第四編

以下順次出版

孝川大大  
黒  
の遊天黒  
續  
鑑び編天

近刊

郵定郵定郵定郵定  
稅價稅價稅價稅價  
金金金金金金金金  
貳八貳八貳八四八  
錢錢錢錢錢錢錢錢

金昌堂

町石本區橋本日  
地番三十二目丁三

肆書行發